

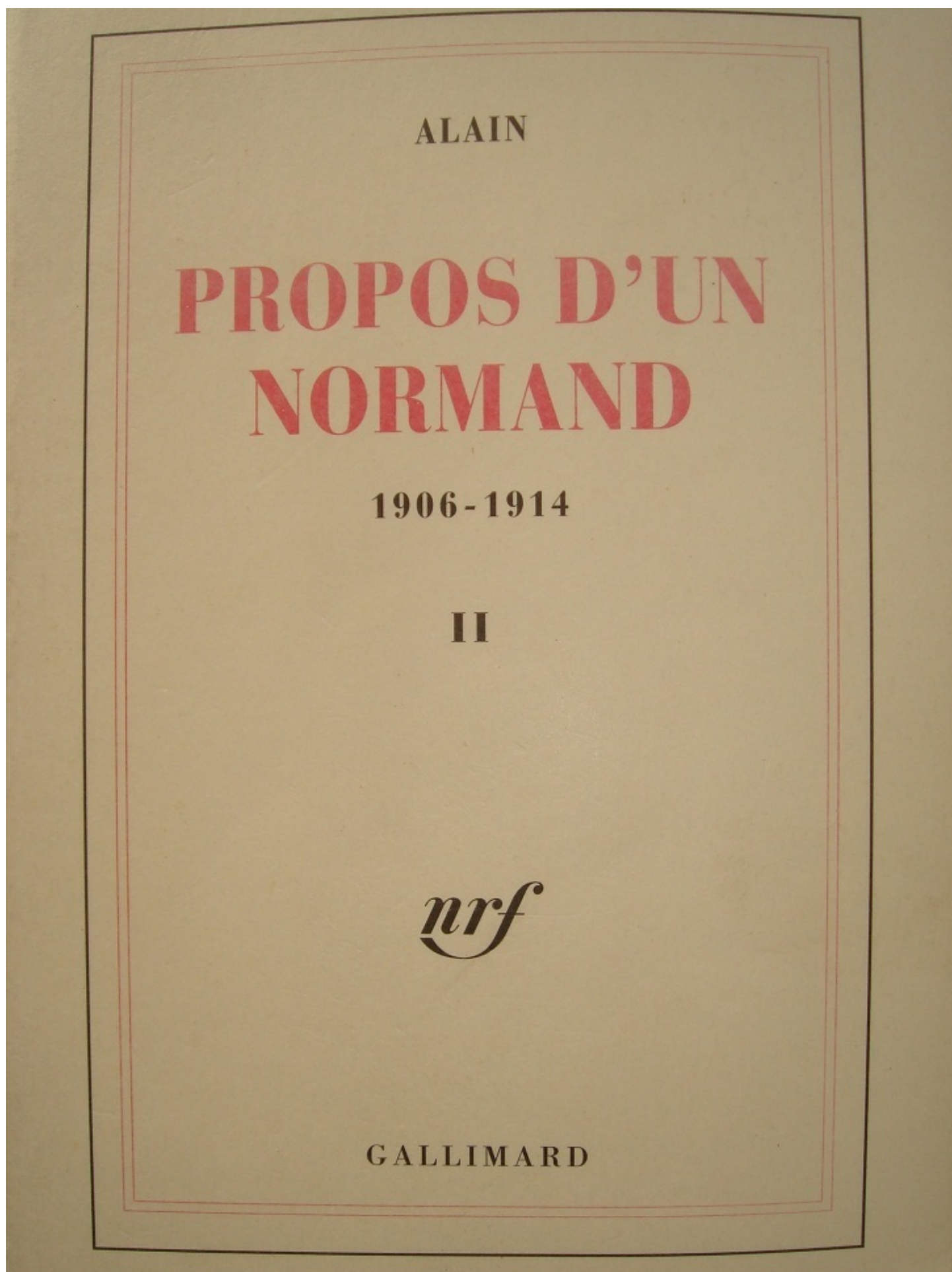


アラン

ノルマンディー
人のプロポII

【2013年4月号】

翻訳：高村昌憲



『一ノルマンディー人のプロポII』(1955)の表紙

ガリマール社が予定している選集のうち第Ⅱ巻に当たるこの巻のプロポは、全てが一九〇六年から一九〇八年までにルアン新聞のために書かれたものであり、きちりと日付順の時系列になっている。それらのプロポのうち、六十一章分はルアン新聞以外には発表されなかったものである。

一 手を持つ人間 (L'HOMME A DES MAINS)

私は、モールス・バレス (1) の『スパルタ紀行』の中で読みました。「人間は、手を持っているから動物の中で最も賢いのである。驚くべき素晴らしい考察である」。この様なことを書いて出版する人々は、猿が四本の手を持っていることを忘れていないのでしょうか、或る猿は五本持っています。それは掴むことが出来る尾っぽを持っているからですが、四本であろうが五本であろうが、猿たちは少なくとも一輪手押車を発明することも出来なかったのです。

人間が自分の優れている点を、特別な性質として肝に銘じなければならないという結論を下すことは正しいのでしょうか。その解釈は、要するに言葉の問題になります。

事物が応えれば応える程、言葉の力を頼ってはいけません。実際に人間は、単に手によって傑出しているのではなく、両眼によって傑出しているのです。幾何学の父であり、手を支配したのは両眼です。数量的に關して言えば、ほんの短い一瞬でも知覚することが出来るのは両眼です。角度の測定を可能にするのは、手と結びついた両眼であり、それは重要なことです。

さて、ここで猿を考えて見ましょう。猿は四本の手を持っていますが、最も重要な意味を帯びるのは触った後の所有であり、見ることの視覚ではなくて、嗅覚です。中心になる脳がそれを証明します。ところで嗅覚は幾何学と関係がありません。嗅覚は情熱の代理人です。猿は物を測る代わりに、愛したり憎んだりします。

それ故に人間は猿が完成した姿であると言うのは殆ど合理的ではなく、鯨は魚の一種であるとか、蝙蝠は鳥の一種であると言うのと同じで、合理的ではありません。

(一九〇六年二月二二日)

(1) モーリス・バレス (一八六二～一九二三) は、作家で政治家だった。共和国における権威と秩序を回復させるために、理工科学学校卒業生、フリーメーソン、無政府主義の危険分子に反対して戦うために一九〇六年五月にパリで代議士になり、国家主義へ向かった。

二 回るテーブル (TABLES TOURNANTES)

皆がやるように私は帽子やテーブルを詳細に調べて、質問しました。帽子やテーブルが殆ど合理的な物として私に答えるのは、型の大きさをアルファベットで取決めてお陰です。自我とこの体験を行っている人々の中には、或る人々はぴんとこないで、半睡状態で良く理解出来ずにおり、彼らにとっては全て奇跡でした。男たちも女たちも、上の空の時間が少しばかり長かったのですが、それで終わりです。他の人々はもっと力強く、大変に感動し、涙さえ流しました。感情の感染は如何に恐るべきことかを私は気付くことが出来ました。

しかしながら、私は実際には心を動かされませんでした。そして、多くの物がそうであるように私は無信仰者です。恐らく、何かがそこにあるとするなら、それはノルマンディーの風土です。

そして次に、今話題にしている現象は自然の關係に依存し、無意識で、視覚想像力と手の動きの中にあるように私には思われました。この様にして私は帽子の回りの大きさについての観点を改めて確認することが大変に良いと思うようになり、次から次へ単に想像しながらその見方によって或る時は変わり、他の時にはその儘確認を続けて行きました。そのことが証明していることは、それらは自我よりも執拗でなく、注意力にとっても大したことありませんでした。

私は、それ以来この種の問題を無視しました。というのは私は次のこと、つまり秩序が大事であると思っていますし、私が存在しているのは肉体があるからです。その上、私の仮定は恐らく大したことではありません。私は自分が提案するものよりも人が提案したものを沢山理解するでしょうし、私の祖先の魂がテーブルの脚元にいると仮定する前に、人が提案したものを吟味することにします。自我の中を吟味するものではありません。

(一九〇六年三月十二日)

三 或る島の中で (DANS UNE ÎLE)

或る島の中の社会で生活する少ない人数の人々を、私は想像します。彼らは一人ひとりが天賦の才に従って働き、自分たちの労働によって全てを産み出しているのが分かります。

問題は明らかなのですが、次のような提案が述べられた時の原則のようなものです。

もし彼らのうちの一人が、生産することなく消費するなら、一人分の仕事の生産が自然と少なくなりそうです。

もし彼らのうちの一人が、無益な仕事に時間を使うならば、例えば金やダイヤモンドで島民の功績としての徽章のようなものを作るならば、彼以外の他の皆は消費を少なくするか、今まで以上に働くことになるでしょう。

私は今、自分が生きているこの社会に目を向けてみると、最早この私には原則が無いのが分かります。金、信用、設備、軍隊、警察、美術、これらのもの全てが真の豊かさを見えなくさせており、その傾向は今も継続しています。

それ故、私が無為や贅沢を攻撃したい時、造詣の深い経済学者が強調して私に言うことは、贅沢が無くなれば労働者の多くが職を失うということです。そして、やることの無い無為な者が仕事をしたいと思うようになって人々の給与を下げるのであり、その結果一人需要と同じ労働力を供給するようになり、かくして或る人々の無為と贅沢は他の人々を豊かにしていくと言います。

不公平は、歳に行った娼婦のように化粧されています。化粧をする以前の彼女を見なければなりません。

(一九〇六年三月十五日)

四 貧しい人々を愛すること (AIMER LES HUMBLÉS)

「私は博愛主義者です。幼い兵士を愛したように、私は貧しい人々や弱者を愛します」。この言葉はラングロワ将軍（1）が立候補した時に表明したものです。驚くべき素晴らしい言葉です。社会制度というものが隣人の愛の上に築かれているのを要約しています。そして、もし私が解釈するなら、次のように言っているように聞こえます。

「人々は公平さを求めているが無駄である。つまり平等を求めているが無駄である。平等は自然の中に無い。平等を打ち立てたいとする法律は自然に逆行する。

幸いなことに公平さよりももっとも美しいものが何かあります、それは愛です。愛すること、そこに全てがあります。愛さなければ、この上なく完璧な公平さは醜くなります。人は愛すると、この上なく酷い不公平でも許せます。

未成年者たちは夜に働くので泣いています。石炭で黒くなるから泣いています。有害なガスを吸うから泣いています。全ては百パーセント以上の収入を鉱山の株主たちに保証するためです。未成年者たちは、どれ程愛されているか理解していないから泣いています。未成年者たちが働いている間に、呼吸する空気の代わりに、博愛の匂いが自分たちの周りに流れているのを感じたならば、その時は気分良く働くようになるでしょう」。

全く違います、将軍。未成年者たちや生活に困っている者たちは、そんなことは少しも気にしていません、もっと気にしていることは感情ではなくて、お金のことです。彼らは魂が干涸らびて弾力を失っているのは本当ですが、愛されていないことなんか気にしていませんし、お金で物を買いたいだけです。彼らには口実があります。慈善行為を素直に認めようとしないのは、慈善の姉とも言うべき不公平の影がちらついているからです。

(一九〇六年四月十日)

(1) イポリット・ラングロワ将軍（一八三九～一九一三）は、退役後に政界入りを図り、ムルト＝エ＝モーゼル県の元老院議員になった。

五 ベスビオ山 (LE VÉSUVÉ)

ナポリ地方の人々は、溶岩が来る前に偶像を移動させても教会の中で潰れて仕舞うのですから、私たちには全く滑稽に見えます（1）。しかしながら、その行為は或る種の道理に叶っていると理解しなければなりません。

火山の噴火による溶岩流の噴出は自然現象です。つまり現象はあらゆるものと結びつきます。ガスが生まれる時の圧力のようなものは、小石が飛んで来たり、溶岩の氾濫のように或る結果の必然性によって齎されます。溶岩流の方向と速度のように、小石の落下点も幾つかの状況に左右されると私たちは考えます。小石の初速や比重や粘性や勾配です。

そして、私たちの恐怖が襲って来るのは怖いと思う時であり、安全であると思うのは私たちが穏やかな気持ちの時であるという思想がそこにあります。平安の外に私たちが火山に願うものはありません。「願いを聞き入れないでいろ、盲目で聾啞者の機械でいろ、私たちは良く観察してから準備して上手く逃げてやる」。というのも私たちは、奇跡によって救われることよりも、自然法則に従って殺される方を愛しているからです。屈服されるが儘の火山は、私たちにとっては最悪のものになるでしょう。うめくような声を上げること、手を合わせること、我が儘な主人にお世辞を言うことは、生きる権利としては大変に高くつくことでしょう。そして、禁欲主義者のように私たちは皇帝の寛大さも、怒りに劣らず恐れるようになるのでした。

偶像を持ち出した人々は反対でした。自然の力は神の怒りや気まぐれによるものと彼らは信じています。一度飛ばされた小石は、物理的原因が無くてもその軌道を変えることが出来ると彼らは信じています。そのことは彼らが考えれば考える程、逃げることも祈ることの方が有益であると信じている理由になっています。もし神が怒りを鎮めるなら、寺院の高い丸天井は萱で出来た屋根よりも脅威ではないのです。しかし、もし神が怒りを鎮めないのなら、如何なる人にも出発するための山小屋はありません。従って彼らが賛美歌を歌って胸をかきむしって後悔しても、自分自身に同意します。彼らが逃げ出したなら、不条理なことになります。奇跡を信じる人にとっては、恐れと同じ位に正義があり、最早ルアン南郊のソットヴィルの平原の中にいるのも噴火口縁にいるのも同じです。

この様に繰り返される大異変で有名な地方にあっても、決して人の住まない砂漠にならず、やっと冷めた溶岩流の傍にやがて太陽の光に暖められる一軒の小屋が建ち、葡萄の実が熟し、教会に鐘楼が建ちます。鐘の音は希望を与え、葡萄の木は全てを忘れさせ、子供たちは大きく成長します。

(一九〇六年四月十三日)

(1) 一九〇六年のベスビオ山の噴火は、火口の外観を変える程に激しく、火山の標高も低くした。

六 フランスの豊かさ（RICHESSSE DE LA FRANCE）

私は最近、大変有能な経済学者と同じテーブルで夕食を共にしました。食事は美味しかったのですが、経済学者の話は詰まらないものでした。

その話は次の様なものでした。フランスは大変に豊かである。イギリスはまさに破産しそうである。そして、他の話題も同じ様な内容です。私は同意します。結局、話は直ぐに終わって仕舞います。

なかなか終わらない話とは、各々の主張を支えている証拠が示されます。何故なら一般的な提案について私は嘸み付こうとは思いませんが、私に信じて貰うようにする理屈には屢々疑ってみたくなるからです。

例えば彼は次の様に言いました。イギリスの海運業は衰退の只中にある、そのことは事実であり、私はそれを十分に認めたいし、あなたはイギリスが破産すると結論付けます。でも私が理解出来ない考え方はそれです。

金物商人であると同時に荷車引きであることを仮定してみます。金物店での取引は、資本とそれに見合う労働で沢山の利益を彼に与え、運送の方は自然と怠るようになるでしょう。そして、私が車の台数や馬の数を数えて言うことといえば、破産している人間がそこにいるのなら、私が言っていることは大変な間違いになります。イギリスの場合も同じ様なものです。海上輸送の仕事だけでは証明されません、その様な話をしても仕事が一番上手く行っている人かもしれないのです。多分そういう人だったのですが、競争相手を考慮しなければなりません。

更に、或る国の財産についての情報というものは、非常に大胆なものです。情報が知らされると直ぐに歪められ、あらゆる側面が崩れます。生産、金、信用又は人口によって人は豊かになるのでしょうか。経済学者たちは一世紀以上もその点について議論していますが、殆どが何時も暗雲の中です。

意見というものは小さな風船です。上に昇り、空中を舞っていますが、破裂させるものは何もありません。

（一九〇六年四月十七日）

七 伯爵夫人は悲鳴を上げます... (MARQUISE, VOUS GÉMISSEZ...)

伯爵夫人は悲鳴を上げます、そして多くの王党派紙幣が優雅なあなたの手から落ちて無くなっていきましたが、如何なる仕事も変わった訳ではありませんでした。私はあなたを理解しますし、同情します。あなたの祖母が危うく首を切られるところであったフランス革命は、廃墟となって思いついたのと同じ計画で再建するような大異変の一つではなかったことが今、十分にはっきりしています。フランス革命が、革命よりももっと恐ろしい何か、最早恐れさせるだけでは済まない何かの始まりであり基でしかなく、尊重されるものであることははっきりしています。あなたは堂々と暴力に反対したでしょうが、〈正義〉にも敬意を払わなければなりません、あなたの目には涙が浮かんでいます。

観念論者たちの愚かな格言は次の様なものです。全ての人間は平等です、それは権利であり事実としてそうである、と。全員が投票することで十分でした。しかし、今は最悪です。あなたのことを考えないで、一人ひとり自分のことや身内のことを考えて投票します。

平和について判断する田舎者は、あなたの権利と小作人の権利との均衡や、あなたのテーブルの下座に着くことを軽蔑します。あなたはもう尊敬されていません。それ以上であり、これらの人々の労働があなたを養い、二頭の栗毛や四〇頭の馬の代金を支払っており、彼らがあなたにお金を齎しますが、彼らはあなたに最早有難うと感謝を言いません。あなたは最早愛されていません。これは最後の一撃になります。感じ易い心にとっては一番残酷です。

確かに、あなたのテーブルに着くことは、あなたには楽しいことで、にこやかでおべっか使いで、あなたは司祭であり、魂の先生です。でも悲しいかな。その司祭は最早、先生以外の何者でもありません。育ちの悪い人間でしかなく、あなたに沢山のお金を請求します。

本当に私はあなたと一緒に悲鳴を上げます。私は進んであなたを、幼い女王のように豪華な王座に就かせます。しかし、実際には私たちはそんなに金持ちではありません。ジェニーが縫い物をして夜を過ごす限り、サシエットが雨の中や泥の中を思い車を引っ張って行く限り、私たちはあなたのために何もやってあげられません。そして、或る者たちは満足感と権力と余暇を手に入れます、その他の者たちはそれを失わなければならないのです。

あるいはあなたの〈神〉の許しを得なさい、〈神〉はあなたのために多くのことを聞き入れ、他の人々と同じ約束を結んでくれます。今年の冬には沢山の鳥たちが餌が無くて死ぬ、と私はどこかで読みましたが、ソロモン王よりも贅沢に着込んだあなた方の庭でしか、この冬は送れません。

(一九〇六年五月十七日)

八 ル・シッド (LE CID)

コルネイユを読もう、今がその時です⁽¹⁾。そして、私は悲劇『ル・シッド』の本を開きました。もし想像力が働かないなら、少なくとも一冊の本は白い頁に黒く閉じられた世界でしかありません、しかし想像力が自由になると、時々思いもよらない道に這入り込みます。

私の想像力は、先ずは大変に素直でした。羽の付いた帽子、豪華なマント、宮殿の室内を私は思い描きます。独りでは上手く進みませんでした、何故なら私は宮殿で暮らしたこともなく、王たちの側にいたこともありませんでしたから。私は何時もフランス座の舞台装置を思い描きましたが、それは厚紙で出来ているのが直ぐに分かります。

私は自分が描いた人物たちに、役所の廊下で言い争いをしている二人の現代の請願者の振舞いや声を与えるようになりました。しかし、直ぐに私はスペイン人に帰っていました。かくして私は次々に浮かんで行列になった王室への心の印象の上での高貴な振舞いによって、私の動物的なものを抑えていました。

しかし、私はそれを調整するのが下手でした。そして、勝利を語る『ル・シッド』の主人公ロドリグが、星々の薄暗い明かりについて話すと、私の想像力は水の匂いを嗅いだ馬のように戦場を跳びはねます。

そこに横たわっていたペドロは昔驟馬引きで、王の兵士に名を連ね、或る日酒を飲みすぎました。彼はその仕事が好きでした。彼は大変に喧嘩っ早く、そして恐怖を抱くよりも早く怒りが襲い、彼は勇敢だと見られていました。

ムーア（モール）人たちが町を襲った時、彼は安宿の女中をしていたマニュエラの部屋へ、お互いに約束をされていて忍び足でそっと這入り、お互いに心から身を捧げました。最初の警報が鳴った時には、理由を知ることもなく彼は良き兵士として走り回っていました。

そして今、彼は胸を刺された槍の穂と共に、仰向けに寝かされていました。彼は山の小径、葡萄の木で一杯の宿屋、冷たい泉、マニュエラのこと、彼が摘んだ薔薇のこと、シャンソンのことを考えていました。しかし、星々の光が弱くなるにつれて、これらのイマージュは全て彼から去って行きました。日の出の時に彼は死にました。この様にして悲劇は終わりました。

(一九〇六年六月八日)

(1) ピエール・コルネイユは、一六〇六年六月六日にルアンで生まれた。このプロポは生誕三百年祭のために書かれたものである。

九 一九五〇年の協同組合（COOPÉRATIVE EN 1950）

天使ジュスラッドは私の髪を掴み、一九五〇年までの時間の線上に私を引っ張って行きました。私は喧騒な大きな町と、急いだ一人の男が再び時流に乗り遅れまいとするのを見ました。私は直ぐに何が大切かを教わりました。

騒いで遊んでいるカラバス家の末裔は、自分の土地を売りに出していました。土地は間もなく組合員数がほぼ十万人の協同組合の資金によって買われて、直ぐに金が支払われ、その男は生活を切り詰めることなく一週間で五万フランを手にすることが出来ました。

ところで急を要していた男は協同組合の名前で、侯爵の小作人たちに次の様に話しました。

「あなた方は二つのシステムの中から選択出来ます。一つは小作人の儘でいることです。この場合、私たちは自分の義務を正確に強く要求しますし、その上財産もその儘で、取り替えることがないように私はあなた方に言います」。

「もう一つの提案を私はあなた方にします。あなた方はもう何もお金を支払いません。あなた方は生産する農産物が出来上がると、全て私たちの店に納めます。その代わりにあなた方は、その店で必要とする機械、道具、衣類、履物、缶詰、コーヒー及び甘い物を全て手に入れることになります。あなた方は病院、医師、看護師、薬、旅行、民衆のお祭りに一文もお金を使わないで済みます。それにあなた方には最早お金がありません。良く考えてみて下さい。私にある時間は一週間です」。

この様に急いでいた男は語りました。そして更に語りました。

小作人たちは屢々社会主義者大会の意見を聞いていましたが、急ぐ男が一〇分間で話したことは何よりも多くの成果を生みました。昔は微笑していた〈友愛〉の人の顔が、今では少しばかり厳しくて厳格な眉をしていました。

（一九〇六年六月二十日）

十 アルキメデスと驢馬 (ARCHIMÈDE ET L'ANE)

〈ユートピア〉とは、まさしくそれは何処にも存在しません。それは頭の中の観念上の産物です。そして、それは少しも現実のものではありません。でも私はユートピアを大事にします。

私たちが学校で習う幾何学も一種のユートピアです。というのも表面的で厚みの無い世界は、何処にも存在していないからです。幅の無い線も、完全に真っ直ぐな直線も、完全に丸い円も存在しません。

しかし、幾何学はそのことに心を留めません。幾何学は自然の中には無く、自然を仮定したものであり、かくして美しい定理に到達し、有益であることが判るのはその後です。

アルキメデスという人が楕円を研究していたとするなら、彼はユートピアを作ったのです。それ以来、そのユートピアは天体の軌道をより正確に示すことを可能にしました。

光の屈折を研究したかったデカルトは一つの仮説を立て、その上に論理を進めました。彼は自分を騙したのです。単にこの間違っただ定理は、幾何学的で機械的な真理を含んでいます。

狂人は火事だと叫びます。もしその時、偶然にも家が燃えていたなら、その狂人は間違っていない。デカルトも間違っていると思った瞬間に、その方法によってその狂人が言った真実よりももっと遙かに正しいことになります。

それ故に私は社会主義を愛しています。人々が社会主義のことを述べて、何度も何度もそれに反論することを私は望んでいます。そして、何処かの屋根裏部屋で社会主義を変革する夢想家がいることを私は願っています。

社会主義者は多分、少なくとも幾何学のように単純化と抽象化の行き過ぎによって間違っています。しかし、さらに悪いことになっても、例えそれらが全て間違っているとしても、少なくともその間違いは理由がはっきりしています。私は実際の型に嵌まった慣習よりも間違っただ思考の方をより愛します。

私は次の様な寓話を想像してみます。アルキメデスが或る日、弟子たちに教えていましたが、彼は間違えました。そして、間違っただ結果を出したのは驢馬が鳴き、アルキメデスの声を掻き消した時でした。驢馬は正しかったのでしょうか。

(一九〇六年六月二一日)

十一 ライオン一世 (LION PREMIER)

ライオン一世は皇帝であり王ですが、大地に槍を立てて言いました。「此処を町にしよう。そして、ライオンヴィル（ライオンの町）と命名しよう」それから、土木工事人や石工たちがやって来ました。道路や広場を区画する線が引かれ、行政府の大建築物を建て始めました。

基礎となる最初の石が、可愛らしい金色の^{こて}鍔で、女王によって固定されました。神に祈りが捧げられました。赤いビロードと金色の^{ふさ}総で飾られた壇上で、そのときに貰ったばかりの新しい勲章をつけたアカデミー会員たちは、退屈な講演原稿を読み上げます。以来その後ずっと、飽きることなくそれは何度も真似されて、続けられてきました。しかし、それらの講演はライオン一世の栄誉を称えるものであったために、ライオン一世は退屈することがありませんでした。

しかしながら、次から次に続々とやって来た労働者や商人たちは、それぞれ自分たちが住む家を建て始めました。或る者は家から左程遠くない場所に井戸を掘り、建築家が引いた城壁の線の外側に飲んでも害がなくて、健康的で、美味しい水を見付けました。他の者たちは色々と調べてから自分の家の周りを掘ります。地下水の層が町から四散していること、巨大建築や公園は水に沿って造られること、そして白や赤の沢山の小さな家が、嘗ては目に見えなかった水脈を緑の植物の上に描き出します。宮殿を建設して、その周りに道を伸ばしていった町もありましたが、うまくいきませんでした。水がないため、人々が家を建てていかなかったからです。

ライオン一世はそんな時、自分の槍を取り出して、白や赤の家々のある処の中央にその槍を立ててにやって来て、賢明で権力のある自分を示すことでしょう。ただこれだけの単純な行為が、神へ祈る度に、大変にうまくいったのでした。それは、〈自然〉への敬意でした。

つまり、町というものは、征服者の意志によって造られるものではありません。木々が苔を育てるように、町は水によって造られます。

(一九〇六年七月八日)

十二 潟 (LA LAGUNE)

私たちは黒人が住む国の文明化を成し遂げました。大砲を撃ち、銃を撃って始めたことでした。今は蹴るだけで十分で、平定の時代に入りました。その時、人々は領土の地図を書くのに一所懸命でした。

地形学が好きな陸軍中尉（金モール二本）は、地面を測量し、角度を算定し、羅針盤と太陽と星々で方向を調べ、そして地図の一部分を持って帰ってきましたが、その断片の主な部分は潟のような所で、縦に長く、東から西へ伸びていました。

その後何日か過ぎ、同じように地形学が好きな大尉（金モール三本）は、序での仕事にこの同じ潟の形や位置を調べ直しましたが、彼は地理学的やり方で地図を作り直してみると、水の広がりには北から南へ伸びていました。

この時、この業務の長であった陸軍大佐は、中尉（金モール二本）を呼んで言いました。「あなたは立派な地形学者です。あなたには理論と実践があり、私に提出してくれた地図は大変に明瞭で、完成度は申し分ありません。私があなたに指摘したいのは一つの間違いだけです。あなたはこの潟を良く理解していますが、5番の地図上で東から西へ表示しました。実際はそれに反して北から南へ伸びています」。

もし二人の地形学者の階級の金モールが同じであったなら、大佐は恐らくその潟そのものを調べなければならなかったでしょう。それだけで三十日かかっただろうと考えますが、人は恐ろしいものを感じて身が震えます。幸いにも今回は金モール二本に対して三本でしたので、疑うべき理由は全て除かれました。そして、それを疑う国民は重い病人なのです。

生きるということは行動することです。懐疑は躊躇を生み、行為を殺します。それ故に、人生には確信がなければなりません。ここからは私が一般の市民たちを理解して言うのですが、「市民たちは批評家としての方法を身に付けていますし、潟を形づくる目一杯の泥水もあります、というのも直ぐに雨が降り始めるからです。そして多分、そのことは私に三番目の考えを齎してくれることとなります。それは何時頃になるのでしょうか。でも決定版の地図は次の郵便で送らなければなりません。〈参謀部〉は待っています。この潟という黒人女性には〈参謀部〉が設置されていることを、陸軍中尉であるあなたは望まないのでしょうか」。

(一九〇六年七月二四日)

十三 (受勲)

私は未だ若くて非常に学問があつて評価の高い人を知っていますが、彼は哲学の先生です。私たちは誰憚ることなく何時も偽物の神のことを一緒に笑っていました。そして、私たちは偽物の神のひげを引っぱがし正体を暴きました。何の偏見もなく私はそのことを信じていました。その中にユートピアとしての市民の一人を見ました。しかし、悲しいかな彼は受勲されたところでした。

受勲という慣習は心を乱す程に重荷になり、神殿を壊すことよりも感情を根絶することの方が難しいことを私は良く知っています。不平等はこの世に古くからあり、平等は泣き叫ぶことしか知らない小さな子供の時だけのものであることも私は知っています。勲章の赤い略章は若者の胸にあるのが良い、と私は思っています。何らかの巧妙な理屈によって、慣習になっている行為というものが正当化されて、ボタンホールの赤い略章と結びつくことは特にそうであることも私は知っています。

分別のある人は言います、「この小さな略章は最早何の意味もないと誰もが思っています。誰もが受勲される時が来ます、つまり受勲信仰は無くなるでしょう」。心ある人はひょうきんな声で答えます、「私が受勲を重要とは決して理解しないのはそのためですが、その徽章を拒否すること、それも一つの解釈方法です。人はネクタイの形とか洋服の仕立てを拒否するでしょうか。その哲学者は仕立て屋によって服を着せて貰い、国の大臣によって飾りをつけて貰っているのです」。

しかし、分別ある人の声は高くなって言います、「不平等は悪であり、階級も悪であることをあなたは良くご存知です。それらはもっと大きな悪から私たちを守ってくれるために、人はそのことを証明することが出来ないのもあなたは良くご存知です。肉体的にもあるいは精神的にも権力というものは、厳格には必要性は無く、悪なのです。あなたはそのことをご存知です。名誉の名において人が犯す罪というものをあなたは知りました。あなたは今、制服の羽飾りを信用しません。ところで勲章のこの赤い略章は小さな制服であり、小さな羽飾りです」。

しかし、心ある人は言います、「それは有害なのです。徽章を付けることは間違っています。勲章を無くすのではなくて、安全なものにしなければなりません。宗教を救いたいと思うなら、見捨てるのではなくて、反対に誠実になり、美点を持つことが出来ることなど、あらゆることが齎されます」。

誰もがこの論理は認識していますし、誰もが一度ならずそのようなことを考えましたが、私たちは古い習慣に再び落ち込みます。私が彼の立場であったなら、自由な人間としての意志を自由に振る舞うことの方がどんなに好きでしょう。アナトール・フランス(1)は最早アカデミー・フランセーズへ行きません。最早、決して行かないでしょう。キュリーはレジョン・ドヌール勲章を固辞しました。スパルタのレオニダス王家の話は以上で終わりにします。

(一九〇六年七月二七日)

(1) アナトール・フランス(一八四四～一九二四)は、ユダヤ人のドレフユス大尉の名誉回復運動に参加したが、当時のアカデミー・フランセーズ会員の大部分は反ドレフユス派であった。

十四 (病人と欲望)

「病気になりたくないと思えば、病気にならないのだ」。頑強な男や彼の話に賛同してビールを飲んでいる連中が昨日、力強く話していました。ゲーテは次の様に言いました。「死ぬことに同意する時しか人は死なない」。そして、司祭ボッシュエの次の言葉は良く知られています。「闘う精神は肉体の主人であり、肉体を元気にさせる」。

この気力の教師に、私は次の様に答えたいと思いました。「私はあなたの言っていることに全く同感です。そして、あなたがそのことを考える以上に、厳密な意味で真実があると思います。

不快感が最高に酷い時の影響は、行為の意欲を不快感に陥っている人から奪って仕舞うことです。未来へ向かっての情熱的な気配り、つまり意志と呼ばれているものが最早無く、自己の存在を何通りも広げて行きたいと望むことから程遠くなり、反対に縮こまって閉じ籠もり、まるで病気に罹っているのを少なくとも見せているかの如くです。彼の望みというものは、夢見ることもなく眠ることです。従って病人の最も強い影響は、欲望を遮ることになります。あなたの格言は検証されます。

逆に、激しい苦悩の中にあっても健康が酷く悪化しないのを示すものは、先見の明をもって未来を見詰める意志であり、目的と方法を整理します。エネルギー的な意志は健康の証です。それ故に精力的でありたいと望んで、病気に勝たない人間は大変に珍しいです。

そして、ゲーテのパラドックスが正しいことを解明するのは、今は既に容易です。危篤となった老人が実際に、精力的に生きることは不可能です。もしその老人に強い意志があったなら、老人は危篤でないことを証明しています。

影響と原因を混同してはいけないことが分かります。人は望むから元気なのではありません。人は元気ですから望むことが出来るのです。〈元気になりたいと望めば、病気は治るでしょう〉とあなたが病人に言う時、次の様に言っているのと全く同じなのです。〈もしあなたの体温が下がれば、病人ではなくなるでしょう〉」。

(一九〇六年八月三日)

十五 (演じる役割)

殆どの人は演劇で陶醉することを経験して知っています。それは多少なりとも長時間継続します。それは私たちに模倣させることの情熱であると定義出来ます。

あらゆる物事においては、模倣することによって始めなければなりません。子供は模倣によって自己を作り確立します。芸術家というものは、始めにコピーを作らなければなりません。それは感情の面にあっても本当です。小学校や中学校を卒業する時、私たちが自分の裡に自然に所有するのは観念よりも遙かに多い言葉であり、情熱よりも遙かに多い演説の台詞です。一人で生活する時の初めての仕事も、感情を話すことが出来る言葉を整えることにあります。私たちが選択するのは、自分のために存在することではなく、他人のために自分を演じる役割です。

出演料が十五スーの端役たちが洋服店に這入るや否や、彼らの眼は三重宝冠の教皇の冠へ赴くでしょうし、両手は気高く王杖を握ろうとし、剣を払い、銀色の厚紙で出来た斧を輝かせて見せようとし、全ては彼らが望んでいることではありません、でも彼らが望んでいることは全員知っています。しかしながら、外見しか問題にしませんし、彼らは何時も十五スーしか受け取りません。

この様にして一つの性格が選択されます。店には沢山の洋服があります。王、大臣、枢機卿、医者、弁護士、判事、アカデミー会員、教育家たちのものです。そして、各人の試みは想像の中で散歩し、行動し、話し、命令し、裁き、弁護し、統治し、ついに一つの役割を選択し、出来得るならばそれを身に受けて真似をします。

従ってそれは感情のためです。私たちは考える術を心得る前に話す術を心得るように、描く術を心得ています。私たちは愛を知ろうとする前に恋人が言うことを大変良く理解し、そして少なくとも余計なことを知ろうとする前に大司祭が罪を許す如何なる雰囲気も大変に良いものになります。それ故に実際に体験することを、誰が話すことが出来るのでしょうか。恐らく、何処かの浮浪者でしょう。それにしても浮浪者が浮浪者としての役を大袈裟に演じていないことを、私は確信が持てません。

プラトンはある処で言っています。「人は金持ちで、強く、権力を持っているように見えることをよく望むが、誰も幸福そうに見えることを望まない、でも実際は幸福であることを皆望んでいる」。私はそれが本当であるか知りません。でも、もし或る人が幸福と見做されるとするならば、胃の調子が良ければ最後には幸福であると信じるでしょう。

(一九〇六年八月四日)

十六 (ノワローは良い犬)

ノワローは良い犬で、義務の意識を持っています。犬小屋の前や道端で丸くなって眠っている彼は、狸寝入りをします。彼の耳と鋭敏な鼻はあらゆる種類の音と匂いを感じ、彼の裡で有益な夢を培います。既にすっかり眠っていても、彼は唸り、内面は動いています。彼の夢は自分を目覚めさせ、やつれさせてそこにいます。そこの道を何者かが歩いています。彼は唸り、毛を逆立てて吠えます。主人は何をしているのでしょうか。悲しいことに、既にこの時、ノワローは自分だけを当てにするしかありません。そして、彼は果敢に吠えます。

歩いている者は太っています。それは人間です。人間は決まった足取りで歩きます。しかし、ノワローは人間の中に、その外にも多くの者を見ました。何時もそんな塩梅で、そして人間が背中を向けて不格好に逃げて行って、ことが終わります。

今後は全て力に頼らなければなりません。そして、ノワローは鎖をぴんと張って、出来る限り口を開いて、恐るべき歯を見せて、胸が裂ける程に吠えます。もう一度努力して吠え、そして終わりました。敵は遠ざかりますが、同じ足取りです、というのも勇気ある敵であるからです。ノワローは小さくなり、直ぐに道の上の一点でなくなります。良い犬は、勝利を確信するために再び何度も吠えて追跡の声を上げます。そして戻って来て、儀式に従って何回もくるくる回ってから眠ります。何故なら良い犬がやらなければならないのはそんな具合だからです。次の様に言って眠ります、「何人の人間がこの道を凶々しく行き過ぎて行ったことか！ 皆同じ様に逃げて行った。私は権力のある犬である」。

眠りなさい、ノワロー、そして力をつけなさい。というのも次の夜には遙かにもっと長く恐ろしい戦いがあることを私は予見して分かっているからです。夕方の最後のざわめきが去ってから少し後に、日中の光が消えると、人々が眠っている間に大きくて光輝く姿をしたものが空に昇って来ます。木の葉の間を通り過ぎてから、その光は家の上方で見下しに来ます。ノワローよ、もしお前が眠っているなら、何がやって来るのでしょうか。誰も何も分かりません。何故ならお前は夜には絶対に眠らないからです。お前は馬鹿ではありません。お前は賢く、経験によって予め学習することが分かっています。

お前は眠らないでしょう。眠らないこととは、毛を立て、牙で齧し、鎖をぴんと張りながら、月に向かって吠えるでしょう。そして、月の光が木の葉の後ろに再び隠れて仕舞い、不格好な姿で逃げて行って仕舞うことはよくあることです。

頭の良い犬の生活にも困難な時はあります。しかし、それ故に気高い満足を！

(一九〇六年八月十二日)

十七 如何に旅行するか？（COMMENT VOYAGER ?）

バカンスの季節になると、僅かな時間で多くの物を見たいと思って、次から次へ観光地を走り回る人々で一杯になるのは明白です。もし人に話すために見るのでしたら、それが一番良いでしょう。何故なら話の中で挙げる観光地の場所は、幾つもあった方が良いでしょう。それなら時間も有効に使ったことになります。

しかし、自分のために、本当に理解するために見るのでしたら、そのような見方は少なくとも私には解りません。走りながらものを見ると、多くの物は似たようなものに見えます。急流というものは、常に急流に過ぎません。全速で観光地を走り回る人は出発の時と同じ儘で、沢山の思い出をもって旅を終えることが殆どありません。

観光地の本当の醍醐味は、詳細な処を見ることにあります。見ること、幾つもの詳細の全てを見回し、各々少しづつ足を止め、そして新たに全体を見回して把握することです。そのことを誰もが素早く行き、次の観光地へ駆けつけて、そして同じことを始めることが出来るとは思えません。少なくとも私には出来ません。幸いなことに、ルアンの人々は毎日、美しいものに視線を投げかけることが出来ますし、例えばサン＝トゥアン（1）の人々も、まるで自分の家にある絵画を見るように、毎日美しいものを見ることが出来ます。

それとは反対に、もし美術館の中を一回で通り過ぎて仕舞うなら、あるいは或る国を観光客として、それこそ通り一遍で見るなら思い出はごちゃ混ぜになって、ついには錯綜した輪郭で味気ない印象になることは間違いありません。

私の好みを言うなら、旅行することとは一メートル進み、あるいは二メートル進む度に立ち止まり、同じものの新しい外観を改めて見つめ直すこと、それを行うことです。時々は一歩右に行ったり、左に行ったりして座ってご覧なさい。全ての物が違って見えます。百キロメートル移動するよりも、多くの物が見えます。

もし急流から急流へ、私が入り込んで行くなら、何時も同じ急流を見ていることになります。しかし、岩から岩へ行くのでしたら、同じ急流が一步進むごとに別の物に見えるようになります。そして、既に一度見たものの処へ帰って来てみると、最初に見た時よりも多くの物を見て捕らえていることは本当ですし、実際に初めて見た時のように新鮮です。習慣の中で眠って仕舞わないためには、変化に溢れて素晴らしい観光地を一つだけ選択することが肝要です。良く見ることが出来るにつれ、何処の観光地も汲み尽くせない無限の喜びを内包しています、と私はもう一度言わねばなりません。星空は何処からでも見ることが出来ます。美しい星空が見える断崖は、そこにあります。

（一九〇六年八月二九日）

（1）パリ北郊の町。八世紀に開かれ、十四世紀に再興されて、国王の居城がある。

十八 奇跡 (LE MIRACLE)

パリの〈勝利の女神像の聖母マリア〉が取り成してくれて、若い娘の病気が奇跡的に治ったことを私は新聞で読みました。人々がよく考えているかの如く、この治癒は大変な議論を巻き起こしています。医者は、今回と同じ様な病気の場合、同じ様に早く完治したことが幾つもあったことを断言しています。主任司祭は、人々が宗教上の加護の中で期待し、その病人を観察し、熱狂するのは慎重であって欲しいと望んでいます。これら議論は全てが一方向的です。

確かにそうですが、もし奇跡を信じるなら、もし好意ある神の意志が一つの理由のために行爲し、私たちの利益のために起こる事件を変えることが出来るという考えを抱くなら、その時はその人が奇跡を見分けることが出来る何らかの徴を探すのに興味を持つに違いないでしょうが、この観点で言うなら奇跡は稀有な出来事であり、学者たちには奇跡を説明する力がありません。この様な奇跡の事件が沢山紹介されます。それ故に、もし私が奇跡を探したなら、奇跡は確かに見付かります。

しかし、もし私が奇跡を信じないならば、もし私が抱く考えが、事件は全てそれに先行した状況によるもので、その状況と共に起こるとするなら、その時は私が奇跡を決して信じないのは明白です。この問題をはっきりさせるために、私は二つのことを考察するだけです。

最初は、もし自然の原因が何時も同じやり方で起こるとしても、事件は全てが似たものになるだろうとは決して言いたくありません。何故なら一つの事件は沢山の原因によって起きるからです。そこから導かれる結論は幾つもの不変の法則によっても大変に異なった結果が説明出来ることです。単純な例が幾つかあります。舟は浮き、石は水の底に沈みます。同じ法則が二つの現象を表しています。この二つの物体は両方とも二つの主要な力に従っています。重さはそれらの物体を下の方へ引き寄せ、水の圧力は上の方へ押し返します。これらの力は、物体の質量と容量という二つの条件に依存します。もし鉄の船が鍛えられて塊になれば、大変な力で水の底へ沈みます。気球は落下することなく空中に浮かび、これ又同じ法則を立証しています。ここで考察すべきは、二つの主要な原因しかないということに気付くことです。多くの場合、特に人生の中で驚くべき事件が起きる時は、沢山の原因が関与し、それらの組み合わせが、この上なく不思議な結果を生むことはあり得ます。それ故にこの意味において、賢明な人は全てにおいて予想するに違いありません。

しかし、無知を抜け出てもう一度別の理由を見付けるためにも、予想するに違いありません。単に原因が交叉し合ったり、お互いに妨げ合うことがあり得るばかりでなくても、私たちはそれらを全て認識しないでしょう。細菌が知られていなかったのは、そんなに昔のことではありません。細菌がそれでもなお存在していなかったとしたなら、と信じてご覧なさい。

従って、あなたが想像出来るのと同じくらい不思議な事件を私に見せて下さい。もし私がそれを既知の原因による新しい組合せによって説明出来なかったならば、私は何か未知の原因にそれを割り当て、私が知っているものとの類似、つまり一つの法則に従って決定して行く方法を取ることになるでしょう。

奇跡の問題はそれ故に実際上の問題ではありません。ですから完治したあの若い娘は、松葉杖

を使わなくても走らせて置きましょう。そして、もし私たちが議論したいなら、神学について議論しましょう。医学についてではありません。

(一九〇六年九月一日)

十九 エスペラント語と迷いの時代 (L'ESPERANTO:TEMPS PERDU)

あなたはエスペラント語を学んでいますか。その言語は出来るだけ単純で規則正しく、発音するように書き、その文構成法は難解ではなく、更にその規則の数は多くなく、如何なる例外も認めていません。フランス人、イギリス人、イタリア人、ロシア人が簡単な同じエスペラント語を学んでいます。そして、簡単であっても思考において可能なあらゆる関係を用意し決定しておりますので、何でも言うことが出来ます。エスペラント語で神学を話し、感情を話し、シェークスピアの強烈なイマージュやラマルティーヌの湖畔での嘆きを翻訳します。エスペラント語は法律や敬語の繊細さも全て表し、もしその知識がある人々であったなら、誰でも知っているように軽業的で奇跡的なライブニッツのモナド（単子）論を歪曲することも全然ありません。

本当にそうです、私は皮肉を言っているわけではありませんし、エスペラント語は殆ど完成された言語であり、もし時間があれば私も学ぶことでしょう。しかし、私には時間がありません。

「あなたにはエスペラント語を学ぶ時間がないのですか。それでは何をやっているのですか？」とエスペラント主義者は私に言いました。

私は彼に言いました、「私には二つやることがあります。人間と事物を学ぶこと、そして私が理解したことを明確に人に説明するためにフランス語を学ぶことです。

フランス語を学ぶことは容易ではありません。私が言いたいことを正確に言おうとすると、十回に一回は成功しません。言葉の選択、言葉の位置、全て重要です。私が一流の作家の作品を読み、それらを模倣して書くようになって殆ど二十年になりますが、実際にフランス語の一寸した言葉でも、その長所を未だ良く知らずにおります。というのも本当にそうであるからで、それ故にフランス語の言葉は観念の外側で或る種の環状のものとなって介在するだけで、観念というものにとっては同じであるからです。

言葉の意味についても言うなら、私は迷います。何故なら、はっきりと定義されている言葉の数は、少ししかないからです。幾何学者と物理学者と化学者の言葉、煉瓦職人と建具屋と錠前屋の言葉です。しかし、何が調和なのでしょう。何が勇気なのでしょう。何が慎重なのでしょう。何が臆病なのでしょう。何が密告なのでしょう。あなたがこれらの言葉を全て英語、ドイツ語、ロシア語、イタリア語、スペイン語、中国語、ブルトン語そしてエスペラント語へ翻訳することが出来るのを私は良く理解しています。しかし、殆ど私は習っていません。私が言うことを意識せずに話すのは、一つの言語に対して何時も十通りの話し方しかありません。

そこからあなたが良く理解するのは、学ぶには二通りのやり方があるということです。人は一つの言葉から一つの言葉へ伝えることが出来ます。しかし、言葉から事物へ伝え、そして事物から言葉へ伝えるために教えることも出来ます。つまり〈宇宙〉から伝わってくるものの翻訳を言葉に与えることが出来るように両眼を開くこと、観察すること、比べること、測って判断することです。そしてこの働きが、世界の平和と正義の進展にとって何よりも重要です。というのも公的であれ私的であれ争いの真の原因は、人間が同じ言葉を使用しないからではなくて、同じ言葉を発音しながら同じ事物のことを思考しないからです。」

(一九〇六年九月五日)

二十 女性の商人 (MARCHANDS DE FEMMES)

男と女はアブサンを飲み、ポケットに金を持っている人々がやるように権限を持って給仕に話をしました。男は恐ろしい緑色の眼をしており、肩は大きく、拳は真っ白でしたが小石のように硬そうでした。女は羽だらけの帽子を被っており、指は指輪だらけで、小皺のある両眼には眉墨だらけでした。可愛らしい娘たちを売買することが彼らの仕事であるのは明白でした。

彼らの動き、笑い、囁きによって彼らが何をやってきて何をやろうとしているのかを、私は見抜こうと努めながら自問しました。多くの事柄がこの世では変わりました。私たちの中には最早、奴隷も専制君主も乗合馬車も馱馬車の主人もいません。病気そのものも変わりました。癩病はなくなりましたが、梅毒があります。何時の日か、梅毒そのものも無くなるでしょう。私たちはバスチーユ監獄を崩壊し、拷問を消滅させました。フランス国は反聖職者主義の政治のためにローマ教皇を無視し、意に介しませんでした。クレマンソー氏は内務大臣です。女性たちは投票権を要求します。あらゆることが変わります。風俗、法律そして神々も変わります。しかし、女性の商売は決して変わりませんでした。

古代ローマのプラウトゥスの時代のように、今日、彼らは娘たちを買ったり売ったりしていますが、娘たちは若かったり歳取っていたり、あらゆる地方の者がいて、如何なる好みにも応じています。彼らは娘たちを町から町へ連れて行き、娘たちの身を飾り、誰でも這入れる店で展示します。そのことは色々な法に触れますから、一つの特別法が彼らのために作られ、特別な取締りが行われました。それは彼らにとってはストライキの時であり、端境期です。制度は変えられます。品行も宗教も同じです。彼らは金持ちや権力者や社会的評価の高い客のためには何でも応えられるように、それだけ何時も美しい女性たちを用意しています。

しかしながら、もしあなたがその男たちに値段を尋ねたら、男たちは定額料金での遊びのことなどお構いなしで、その時の気分で勝手に値段を付けることが出来ると言いますが、遊蕩や色っぽい写真なら学生の男たちしか相手にせず、彼らが言っていることの大部分が嘘であるのは明白です。女性たちは純朴であると良く言われますが、もし急に彼女たちが喫煙室で男たちと話している会話を聞いたなら、沢山の事柄について意見を変えることになります。しかし、女性たちは立ち聞きされなくても、兎に角良く勉強することが出来ます。一人でも次のことを良く考えているのです。女性たちを売買する商売があること、そしてそれらの取引がもっと繁盛することです。それは只単に見物人が寛大になることばかりでなく、買手の人数が多くなることも想定しているのです。

(一九〇六年九月二十日)

二十一 風車 (LE MOULIN A VENT)

昨日、私は断崖の上にある古い風車を詳細に眺めましたが、風車は少しずつ回転が鈍くなり、ことごとく何処か折れて軋む音を立てながら、とうとう止まって仕舞いました。風は強く吹いていませんでしたが、私の帽子を吹き飛ばすには十分でした。しかし、古い風車を回転させるには悪魔のような強風が必要です。

私は思いました、この風は仕事をするには不都合です、何故なら仕事をしないからです。もし私がここに金属板の小さなタービンを取り付けたならば、翌日まで回り、小麦を挽いたり、水を汲み上げたりすることが出来るでしょうし、それは人間の苦役を減らします。

しかし、注意しなければなりません。私は人間の苦役というものを大変な見込み違いをしています。この古い風車は、自然が私たちに与えている物によって造られてもいます。小石と梢です。タービンは遙か遠くから来ます。坑夫たちは大地の下で探し求めました。そしてそこは泥だらけの錆となって隠されていました。他の坑夫たちは錆を溶かすために石炭坑道の奥で石炭を探し求め、溶鉱工たちはそれを地金に流し込みました。鍛冶職人たちはそれを金槌で鍛えました。その他の人々はタービンが作られる工場で、炉や動力ハンマーや圧延機を使い、何千もの道具が用意され、ヤスリがかけられ、艶が出て、調整されます。そのタービンがぴったりと上手く行く瞬間に、辛くて自由のない労働の日々が完成された鉄製品の中に組み込まれます。これらの労働の日々があるということ、そのタービンはその日々を人間に返す義務があるのです。恐らく、その借りは返すのでしようが、それが人間たちに与え、人間たちを形成していると信じるのは止めましょう。人は無料では何も持てません。

そして、もし経費を良く計算するなら、風車の質素な経済性はタービンよりも経費が本当に少なく、返す義務も少ないからタービンよりも良く稼ぎます。陽気な大工がパイプを吹かしながら、雲の流れを見詰めながら、働くのですから、風車が働いているのは楽しく、夢があり、誠実です。

私たちは自分の機械を自慢します。何となればそこに蓄積された労働の日々の日数を計算しないからです。私たちは金勘定して、その労苦は数えません。『テ・ミゼラブル』の中で或る女が言うように、「全てに価値があり、愛すべきものです。この世で愛すべきでないものは労苦だけです。この世の労苦は価値がなく、只同然です」。

(一九〇六年九月二四日)

二十二 (箴言と行為)

歳取った男が私に言いました、「宗教から独立したあなたの道徳は、私には全く滑稽に思える。あなたは、大変に単純で余り高くない教育を受けた人々に対して理性のことを語っているが、彼らは只単にあるが儘を知ることが出来るだけだ。ですから自分の理性を使用している人々、つまり自分だけのやり方で自らを教育し、新しい学問を創り出している人々がフランスに何人いるか数えてご覧なさい。あなたが数えられるのは百人もいないでしょう。他の殆どの人は、あなたや私のように律儀な人間で、少しばかり記憶力があり、せいぜい本を読んで記憶に留めて置くだけである。彼らの理性は殆ど目覚めていないで、今でも半睡状態だ。それに反して彼らの情熱は蠢いていて唸っている」。

彼はつけ加えて言いました、「私としては、もっと単純で寛大な道徳の方が好きで、新約聖書の方に私はそれを見出している。〈彼らがもしもお前の処にいて、お前が望むように、お前は彼らと共に行きなさい〉。ここには偉大なる秘密がある。ここには規範の中の規範がある。心によってそれを確かなものにするもの、確実な秩序として受け入れるもの、超自然の力によって齎されるもので、正義、慈愛、勇気というあらゆる美德を含んでいるものである」。

私は彼に答えて言いました、「私は理性という言葉から、最良で稀有なものという理解はありませんが、只単に人は良識のことであつたり、正しい判断のことを言っているのだ、と敢えて私は言います。神の規範が如何なるものか、そして偉大なる秘密が私たちに良識の所有を施すものであるのか、私は全く分かりません。あなたは私に有名な箴言を示しますが、それは新約聖書の中にあつたり、新約聖書よりも古い時代に書かれたものです。この箴言は非の打ち所がないものですが、箴言は行為ではありません。あなたの信者は良く話しますが、私はそれを実践し応用することに期待します。

彼は召使いを雇い、与える給料を決めることとなります。ところが出来ることなら黙認して、彼は自分の規範を適用します。箴言に身を置きたいのなら、召使いの身になるべきではありませんし、その人間を良く知る必要もありません。財産と地位、苦しみや喜びとは何か。もしも知らなかったり間違ったりしていても、それは重要なことであるとあなたは思いますか。

週毎の休日(1)を考えてご覧なさい。そのことについて私の回りでは皆が話しますし、直ぐに活発な議論になり、まさに必然性はありません。そうです、もし私があなたの規範を適用するように勧めるなら、皆が賛成するでしょう。しかし、私たちがそれを適用しようとする時、その時は私たちが議論します。良き意図や良き箴言以上に平凡なものは何もありません。つまり良き行為以上に稀有なものは何もないのです」。

(一九〇六年九月二七日)

(1) 週休法は一九〇六年七月十三日に可決され、労働総同盟(CGT)は労働時間を一日約十時間から八時間にすることを一九〇六年五月一日に宣言していた。

二十三 (満員列車)

真夜中です。人々は震え、子供たちは駅のホームで泣いています。汽車がホームに戻って来て到着するのは、何時もの時刻です。つまり定刻の五十分後です。ブレーキをかける軋む音が終わるや否や、旅行者たちは競って突進し、長い通路を走ります。ここには何杯も酒を飲み干し、歌う水兵たちもおります。その夜は、大変遠くから乗り込んだ一家が軀をかいたりため息をついたり、ぶつぶつ不平を言ったりもします。何処も彼処も同じ言葉が聞こえます、「満員だ」。

たっぴりと十分間も空席を探し回った後に、ケンケ燈に灯をともし、旅行者たちの人数を数えた後に、荷物を動かし、母親と一緒に子供たちが押しつぶされた後に、父親は家族の一人ひとりを彼方此方の空席に押し込んで、ショールや毛布やパンやチョコレートや哺乳瓶を家族に分け与えようとしています。その間も列車は汽笛を鳴らして走っています。これは陰鬱な物語であり、彼らの話も長くなります。

では人々は公平を要求していると思って下さい。そこにいる家族は海水浴へ行く切符を持っています。他の旅行者たちは不平を言うだけで、彼らを買ったのも自由席です。殆どの人がそうでしょうが、一人で二つも三つも席を確保したいと思い、悪知恵を働かせたり嘘をついて独占したりするのです。各人の夢は、如何なる方法でも良いから一つのコンパートメント（車室）を自分一人で確保することで、もしそれが上手く行ったなら、彼の話は自慢するに値する物語になります。或る人は荷物や毛布を旅行者たちが眠りやすいように整理します。別の人は通路を塞いで、煙草の煙を雲のように出しています。そこでは国家がどのようにして形づくられるのかが良く分かります。既に、同じコンパートメントに席を確保した旅行者たちは同盟を結んでおり、汽車が駅に到着すれば敵が来ることになります。しかし、もし敵たちが席に着いたなら、その時は新たな乗客たちと同盟を結ぶようになり、殆どがその様な調子で続き、自分が望んだように思い通りには行かないこともあり、空席でも偽って平気で嘘を言います。

それ故に公平を説いて下さい。この様な状況においては正直で恐らく寛大であると見做される人間がその時は、小さな喜びを手に入れるために、それと相似た様な大きな労苦を人に課しても躊躇しないのです。私もそれを行えたのは旅行期間中でしたが、新約聖書の福音の箴言を守っている人は一人も見かけませんでした。扉を開けるや否や「ここに三つ席が空いてますよ」と言って教える人です。但し、その人は皆から軽蔑されることになるでしょう。

(一九〇六年十月十二日)

二十四 支配することと困難 (GOUVERNER:DIFFICILE)

行為を、もっと行為を、常に行為を、これが私たちに教えていることです。私は行為を喜びますが、多くの人々が理解しているように私は行為を理解していません。何故なら多くの人々が法案は雨が降るように沢山与えられると思っていますが、私はそれらの法案の問題はごちゃ混ぜになり、幾つもの役割が混じっていると思っていますからです。

政府は法律をよく提案することが出来ますが、それは政府本来の機能ではありません。政府本来の行為は、法律を制定することではなく、法律を適用することであり、それは一人の人間の個人の観点で行われ、個人の方法で行われることです。政府の長が一つの法律を適用することは、少なくとも二人の人格に苦しみます。法律を守って行う人物と、法律を守るための任務を帯びている警官のような人物です。二人の人格の間では、それらが抵抗するのは確かであると言うことが出来ます。何故なら一方では法律は邪魔であり小さな問題を複雑にするからです。他方では平安を愛して法律の敵になることを恐れているからです。

沢山の法律がありますが、法律とは一致しない個人的興味も沢山ありますから、法律に対して或る種の暗黙の陰謀が生まれ、あらゆる市民がその中にだんだんと這い入って行き、或る者たちは理性に向かい、その他の者たちは別のものに向かいます。

結局、大した確信もないのですが、全ての人々が大声を上げて要求することは、あらゆる法律が適用されることであり、同時に一人ひとは或る一つの法律を免れるために、陰でこそこそ働きます。というのも皆は市民道徳を持っていると言いますが、実際には殆ど持っていないのです。その良い例は官僚たちで、自分から行動せずに半睡状態におり、何か昇進したとか勲章を貰うのに汚点となることは殆ど積極的にやろうとせず眠っています。その結果、公共機関は恐ろしく硬直化してきます。その運用は、水を剣で切る様に、常に伝統的なやり方で僅かな効果しか上げません。水には抵抗感がありませんが、非常に早く自分の地位という水準は理解しています。

それ故に大部分の支配者たちは、静かな水と無駄に戦った後に、もっと沢山の快い別のやり方を手に入れます。それは言葉の解釈をかき回したり、法律の条文にそれらを整合させることしか問題にしません。少なくとも、一度法律が公布されても問題は何も解決されません。〈政教分離法〉にそれを見ることが出来ます。それらの障害をすり鉢の中で粉々にしようとしなかった者がいますが、その様な者は支配することしか知らないのです。

(一九〇六年十月二六日)

二十五 慈善 (CHARITÉ)

寄付者一覧が寒い季節になると又回って来ます。スープや服のない人々にそれらを与えることは重要ですから、サインすることは確かに善いことであり、常に善いことですから私は進んでサインします。ここでは喜びを金額に計算することが有用です。あなたが寄付する一フランの喜びを、他のことと良く比較してみてください。一人の女と二人の子供が寒さに震えて空腹でいるのを実際に救うためにお金を出して喜びを得たとするなら、あなたは本当にお金の使い方が全く不器用であると自分を認めます。

但しお金を出した後は、議論し考えて欲しいと私は強く願います。多くの人々が善意の寄付をします。或る人々は慈善事業へお金を与えますし、他の人々は自分の身体を使い、彼方此方を走り、極貧の地区へ行って、老人や病人や子供を探し回ります。大変容易に金を与えるこれらの男性たちの人数を私が数える時、隠れ家まで哀れな人々を探しに行く女性たちの人数も数える時、どうして貧しい人々がいるようになったのか、私は自問します。

結局のところ、貧乏は疥癬や禿頭病やコレラのような病気ではありません。貧しい人々は何かの原因があって貧しいのです。悲しみの源泉に遡行してご覧なさい。職業、労働、貧しい人から金持ちまで自然に出来る関係、次に何かの病気、失業、あるいは低賃金、結婚や子供たちのことで殆ど我慢出来ない多くの状態をあなたは見出すでしょう。そして、もしその悲しみの原因を良く見るなら、或る業者や主人は自分たちの利益を少しも犠牲にしたくなかったし、そんなことは考えたこともなく、最低賃金で労働者を雇い、まるで卵を買う主婦のようであり、何時もそうだったのです。

そして、奇跡のようなことですが、悪いことが一度起こると、そのために次々と悪いことが起きて仕舞います、というのも悲しみは病気を引き起こし、病気は悲しみを引き起こすからです。その時、あなたは前述した使用者と主人のこと、彼らの妻のこと、集まって協議して消費すること、要するに労働者の利益分配制の組織を作ることを知りますが、私が知る時は余りに遅く、損失を出します。

何故そうなのでしょう。何故、人はそう願っている限りは慈悲深い人々と出会うが、公平さだけが無いのは何故でしょうか。

(一九〇六年十一月五日)

二十六 神々と夢想 (LES DIEUX ET LES SONGES)

〈教会〉についての議論というものから、大変に長い間に奇跡や、翼や気球も無く空中へ昇る人々や、地上へ降りた神々や、生きている者たちと話をしに戻った死者たちと関係して民衆化して、大変に古くからの信仰の起源が如何なるものであったか、と私は自問するに至りました。

これらの信仰というものは、夢想が齎すものであると思います。私たちが眠る時、日常的秩序に対峙する出来事が分かると思います。私たちがこの世に無いものや、死と共に自分の生活を保って慰めになるものや、恐ろしいものを理解します。目覚めた状態で感受する現実の対象からこれらの空虚なイメージを良く識別するためには、今までよりもう少し熟考しなければなりません。思い出すことによって、それらは全て大変に良く混ざり合ったり反発し合うことが出来ます。例えば子供たちは夢と実際の出来事を良く見分けていないように見えます。

従って何千年もの間、人間は今日の子供たちのように見えますし、自分が夢を見ているという認識もなく夢見ていたのであり、そして奇跡や神の存在や死後の世界があると信じて来ました。そこから懇願と寄付が生じます。

夢想のイメージが実際には存在しないという考えを持っている天才は如何なる者か、全く知られておりません。恐らく一人ではなく複数いたのであり、彼らの言うことを聞いた後で、多分、不信心で神を冒瀆する人として拷問にかけて殺されて仕舞いました。しかし、天才たちが言っていたことは、基本的には殆ど夢想しない人々を熟考させて、冷静な人間になることであって、それは頭脳を働かす者である前に、食べ物を食べなければならない胃袋を持つ不信心者であることです。

要するに一番冷静な人間とは、彼らの中でそのことを話した後、眠りながら行動したり話をする人々を観察した後、自分の人生というものを眠って夢想する狂人たちと同じで、彼らは夢想や狂気やそれらと同じ種類のものと同じく共通した観念を生み出しておりますが、恐らく冷静な人間というものが人間の中の理性を最初に解明するでしょう。聖職者たちは、それでも手探りでこの理性を高慢で墮落したものとして当然告発します。

それらの観念は、それ以来歩みを進めて来ましたが、人が言うほどには速くありませんでした。今日でも内気な羊飼いの娘は草の上に眠っており、聖母マリアが自分に話をする夢を見て、それが夢であることを知らずにいます。私としては、もしも何かの奇跡を見たならば、そしてその奇跡を説明する何か本当らしい仮説が見付からなかったならば、私は夢の中でそれを見たと自分に言うでしょう。そこでの仮説は、少なくとも全知全能の神のものよりも複雑で難しくないので、その仮説の成果を訂正したいという欲望を試してみることになるのです。

(一九〇六年十一月十四日)

二十七 人の立場に身を置くこと (SE METTRE A LA PLACE D'AUTRUI)

人の立場に身を置いて考えること、それが正義への奥義であり、その結果として真の慈悲を理解します。方法があるとすれば、それだけです。もし私が何でも調べて知ろうとする憲兵としてではなくて仲間として判断すべきであったなら、先ず彼のことを理解したいなら、私は彼の立場に身を置く必要はないに違いありません。それは私にとっては最善の時です。つまり明快で慎重で、人の権利に注意を払い、自分の情熱を抑制出来る主人になる時です。反対に、他人の立場に身を置いて自己を二重にしなければならない時は、私にとって不愉快な時間で、悲しみと怒りの間を行ったり来たりさせられます。そんな時は多分、霧のように何かぼんやりとした観念が私に表れて、思考も事物も全てを覆って仕舞うでしょう、彼が殴ったような時です。かくしてこの様な場合、私自身の最悪の部分に彼を帰すことは正しいことです、懐に潜り込んだ猫のようなことを言われたいためです。「何だって、あなたの席なんか何もありません。同情も尊敬も要りません！」。

しかし、もし私が誰か哀れな人の生きる手助けをしたいならば、私とその人の立場に身を置くようになるに違いなく、その人の苦しみを小さく見ないで、安易なことは言わないやり方になります。「その様にして幸福になります。それ以上は何も望みません。その様な人々になれば凄い食欲です。寒くもありません。」

馬が問題の時は次の様に判断して、私たちは自問します。「鞭で打つような強制的なやり方は多くの不幸を生みませんが、馬たちを刺激します」。馬のことなんか構うことありませんが、人間が問題の時はかくして合理的になるのが正しく、長い道のりになるでしょう。本当のことを言うと、あらゆることに決まったやり方は最早ありません。私の喜びの気持ちが、やり方の基準になるでしょう。

かの有名なオラトリオ会修道士のマルブランシュ（1）は従って、動物たちは機械であると信じて、叫び声を上げるまで自分の犬を叩き、次の様に友人に言いました、「犬は何も感じないのだ。というのも犬には魂がないのだから」。人間にも同じやり方で接することには気を付けましょう。そして、この陥穽から確実に避けるために、あの規則を守りましょう。つまり私たちがその様な不幸の立場に身を置きましょう。そして、あたかも私たちのこととして問題にしている様に、彼らの利益を考えましょう。そうでなければ、私たちは金持ちが考えた算術に陥ります。その算術によれば、貧しい人は直ぐに金を使うために、何時も余分な金を持っていることになるのです。

(一九〇六年十一月二四日)

(1) ニコラ・マルブランシュ（一六三八～一七一五）は哲学者で、デカルトの物心二元論を克服しようと機会原因論を主張した。著書に『真実の探求』Ⅱ巻（一六七四・五）や『道徳論』（一六八三）などがある。

二十八 記憶と知性 (MÉMOIRE ET INTELLIGENCE)

明日とか明後日の学校で起きる光景です。算数の先生が、大変簡単な問題を子供たちに次々に出しています。一人の子供には「八足す八はいくつですか?」。ボタンを押すと直ぐにベルが鳴るように、ぽんぽんと「十六です」と子供は答えます。先生は満足していない様子です。同じ生徒に尋ねます。「七足す五はいくつですか?」。何時もぽんぽんと答えるその生徒は言います、「四十五です」。その後直ぐに「十二です」と言い直します。先生は答えを間違った時と同じ位に、正しく言った二つの答えにも不満な様子です。

先生は別の子供の方へ向きます、「九足す八はいくつですか?」。素直そうなその子は、指を一本ずつ小刻みに動かします。非常に速く動かして答えます。「十八です」。「大変に良い、あなたは分かっています。又は少なくとも正しい答えに近く、大きな間違いはしていません。さあ、もう一度計算してご覧なさい」と先生は言います。今度は「十六です」と、その素直そうな子供は答えます。先生は言います、「素晴らしい」。そして、本当の答えをその子供から無理に引き出そうとせずに、他の子供たちに向かって相変わらず質問しますが、今日の学校の先生方をびっくりさせるようなやり方で何時も褒めるか咎めています。

古いタイプの教育者はそのことを聞き、何か臆病になってこの算数の先生に次の様に反論します。「あなたがそんなことを行っても、私たちの教育が記憶の中に残すに違いない痕跡を、あなたはすっかり混乱させても恐れないのですか。結局のところ私たちは出来る限りの真実を教育しなければなりません、そしてそれを若い頭脳の中に多くの適切な記号として書き込まなければならぬのです」。

それに対して算数の先生は答えます。「もしも記憶の中に記載されるだけなら、真実の何の役にも立ちません。私がおっと良く愛しているのは自分自身で見出した真実の近似値であり、それは繰り返し練習することの真実です。私が記憶の中の道を混乱させているとあなたは言いますが、寧ろ私は踏み固められた道を耕し直すと言って下さい、というのも教えられた考えが羊の群のように往来する道であって欲しくないのです。常に掻き回して耕された大地、常に労働によって一新される大地であって欲しいのです。

子供は良く平然と答えますが、私は子供のことを考えることしか知りません。私が何時も予期しているのは、何か大きな間違いであって、間違いを言うことは無駄ではないと私は理解しています。子供は反対に熟考して二つの小さな間違いを言うようになりますが、それは大切なことであり、正解は二つの間違いの間にあり、彼は整然と正解を求めることを知っていますから、既に大変な学者であると私は高く評価します。或る人が本当のことを言う限り、私はそれを判断することが出来ません。私が彼に期待するのは最初の間違いであり、間違える方法に倣って私は彼を判断します。」

(一九〇六年十二月一日)

十二月二五日の真夜中のミサに如何なる意味があるのでしょうか。それは太陽の祭りであり、夜への或る種の別れであると私は考えます。真夜中は太陽が降下して行くのを終える区切りの時であり、毎日少しずつ太陽が再び上昇し始め、光や暖かさや喜びや植物の緑や収穫物を齎します。神が新たに誕生したかのようです。そして、星々を見詰めたり太陽の運動を測定を知っている人々は、何よりもこの誕生を見抜いています。私が考えているのは、その様な星の運行の意味です。従って、クリスマスは既に〈春〉の祭りです。

クリスマスには復活祭というもう一つの意味があります。太陽の再来を祝うものでもありますが、但しもう少し遅い時期のもので、その祭りが期待するものはもっと暖かい太陽、花々の開花という感覚的効果です。その祭りが最初に考え出された時代は天体をまだ良く観察せず、冬至の概念もなかったと私は結論を下しています。

その後、天文学者たちが太陽の復活をもっと精密に定め、その時から新しい祭りの意味は大多数の人々にとって全く曖昧な儘になっていました。何故ならその時は丁度、寒さが一番酷くなり始める時であり、太陽が再び顔を出して挨拶し、日が長くならなければならない時でもあるからです。そのことに倣って、私はクリスマスを賢者たちの復活祭と呼び、復活祭を無学者たちのクリスマスと呼びます。

このことは多分、全て歴史学者が理解していることとうまく一致していないと思いますが、そんなことは重要ではありません。何故なら、歴史学者たちが知っていることは大したことではないからです。彼らは小麦の耕作の始まりについて何も知りませんし、船の始まり、梃子の始まり、車輪の始まり、火の始まり、一輪手押車の始まりのことを何も知りませんし、火薬の始まりのことさえ知りません。本当のことを言うなら、人類の歴史における最も豊かな時代を歴史学者たちは完全に理解していません。

歴史の始めの物語において、人類は既に老けた大人になっており、既に今日も同じ知識を持っているだけです。人類は今日と同じ力学、同じ道徳、そして同じ宗教を持っており、間違いしか忘却しません。この様にして何世紀もの間の試練と戦った慣習というものは合理的です。神学者たちはお喋りの抽象的観念と共に、そこに閉じ込められた真実の思想を消し去るまでには至りませんでした。かくして断食、罪の懺悔、聖体拝領、ミサ、クリスマス、復活祭の全てに意味があります。宗教においては全てが真実ですが、説教は除きます。全てが良いのですが、司祭は除きます。

(一九〇六年十二月二九日)

私は昨日、乗合馬車の二頭の馬を観察しました。二頭のうち各々は拘束状態から解放されるために果敢と働いていましたが、同じ方法ではありませんでした。

二頭のうち一頭は若かったので性急で、殆ど息をつく暇も取らず激しく綱を引っ張りますが、前進したかしないかはどうでも良いのです。馬体は汗だらけで、鼻からは荒々しく白い息が出ていました。蹄鉄を付けた足元では石畳が火花を放っていました。明らかに、自分から外へ出て行く力を既に量れずにおり、自分のものに出来ずにいました。そして、その場で無駄に飛び跳ねる時でも、立てた音と努力が活動するという幻想を与えていました。革新とはその様なもので、馬の裡で起きたことが人間の裡でも起きる様なものです。

もう一頭の馬は温和でした。諦めていたのではなく、決してそういうことではなく、強情であることはもう一頭の馬と同じでしたが、もっと利口でした。ブレーキが軋むと、どんなに前へ進もうと頑張っても無駄であることをその馬は理解して分かっていました。その時は停止し、大きく息を吐き、力を回復させて、あらゆる勇気を奮い起こしました。そして、その馬には良く分かっている合図で障害が外れて前進しやすくなるのが分かると、弛まない力で綱を引っ張り、地面に上手く足を付け、少しずつ筋肉を緊張させて行きました。恐らく、次の様にその馬は言っていたのです、「私は前進し、私の努力は空回りしません。他の馬に対しての勝利と一歩が私を自由にしてくれるでしょう」。それからその馬は多分、もう一頭の仲間にもこのことを説明しますが、仲間は年寄り扱いしました。

二頭とも無知だったこと、それは馬たちが戦っていた綱は二頭を連結していたものであり、時折、二頭が勝った障害はブレーキではなくて頑丈な馬車であり、それは大きな車輪の上に乗っていて、仕事へ行く人々で一杯だったことでした。

(一九〇七年一月三日)

三十一 春の狂気 (FOLIE AU PRINTEMPS)

私は哲学者と言われている人と会い、彼はマントに付いた粉雪を振ってすっかり払いながら私に言いました、「実際に強姦者たちが出始め、次に哮り立った犬たちが出て来るようになると、全てそれらは春が遠くない証拠である」。

私は彼に言いました、「氷っている泥濘に足を踏み入れる時に、春のことを考えるには哲学者が必要です。しかるに四季を通じて狂人はいるに違いないとあなたは考えないのでしょうか」。

「その通りである、何時でも小さな粒の種子はある。しかし、地球の半分が太陽側に向き始める時、氷の層が極地側でばりばりと壊れる時、そして水が山腹を流れ始める時、人間の血液も氷が溶けるように激しく多量に手足を通して頭の中を流れ始めるのだ。それは情熱と悪徳を刺激する。或る者の裡には野心が目覚め、他の者の裡では恋愛が芽生え、知能が足りない者たちの裡には狂犬病のような憤怒が生まれる。人々は新しいワインのように醗酵し、感情が沸き立っている。雪の下にあるこれらの仮面を全て見せてご覧なさい。女は男のように見え、男は女のように見え、彼らの鼻はすっかり異常に敏感で、理性ある人々でさえも少しは狂ったように騒ぐことも必要であると教えている。そして、始まったばかりの四旬節(1)にも同じ意味がある。復活の受難を、血を流している牛を食べて祝うことは危険であり、血を断つことで人間の愚行を減ずることは良いことであると司祭たちは理解したのだ。断食は謝肉祭の後に来るが、それは初期症状の時に飲む薬のようである。大変に行儀が良いものだ。神を讃えよう。神がしでかした大失敗を修復するために、多くの理性を人間に与えたのだから」。

私は彼に言いました、「しかし、あなたは哲学者です、暑くなったり寒くなったりすること、大地は此処でも彼処でも回転していることを、私はあなたに何時も冷静に見せています。でも、あなたは断食を守っていません」。

彼は言いました「私は自分の本質や長い修行の結果として、私の情熱は全て話の中で弱くなっているのだ。私は言葉で正気を失っている。そのことは誰にも悪にはなっていないのだ」。

(一九〇七年二月十五日)

(1) 四旬節は、カトリックで「灰の水曜日」から復活際の前日までの四十六日間で、主の日(日曜日)を除いた四十日間の齋戒期間のことで、キリストが断食修行を記念したものである。

三十二 田舎の労働者（OUVRIER DE CAMPAGNE）

田舎の建具職人の小さな家は庭に囲まれています。そこには三人の子供が走り、妻が行った来たりしています。井戸から台所へ行ったり、下着を洗ったり、兎に草を与えたり、食事の準備をしたりしています。建具職人の彼は、飽くずの良い匂いで一杯の仕事場で歌を歌いながら仕事をしています。もし他の家へ働きに行くならば、その時は空気を鼻から吸い込み、雲の流れを観察して静かに出掛けます。そして、彼は農民と会うこともせず、次の収穫期とか皆と一緒にやるべき仕事がある時でも、農民が彼と話すことは少しもありません。日曜日になっても建具職人は居酒屋へ入り浸りにならず、蜜蜂の世話をしたり庭を耕したりします。そこにいる男は、美しい絵の一枚も見ません。名曲を聴くこともありませんし、講演を聞きに行くこともありません。彼は電話も電灯も知りません。自分の道具と両手と業以外の機械を知りません。けれども事物のことは良く知っており、読書をしたり人から聞くのではなくて、直接見ることによって毎日学んでいます。学んだことは、話すためでもなく思考するためでもありません。そこには端倪すべからざる人生があります。

工場労働者は、日当たりが悪くて換気が悪い部屋で一日が始まります。彼と妻は味付けされたコーヒーを大急ぎで飲み、後片付けをしてきれいにして、小学校や幼稚園に遅くまでいる子供たちの服を急いで着せます。妻は小さな子供を連れて工場へ行きます。そこには託児所という子供たちのための小屋が建っています。

男も女も埃や煙だらけの空気の中で一日十時間働きます。息を吹いているような力強い機械に追い立てられて、何時も走っています。夜になってやっと彼らは子供たちの涙をかんでやる時間が取れるようになり、馬鹿になってへとへとに疲れて、自分のベッドへ身を投げます。彼らは日曜日になると、石油の臭気を放つ郊外で過ごします。この正気を逸したような労働を二十年間続けた後も、彼らが田舎の陽気な建具職人よりも豊かになることはないでしょうし、健康ではなく、金持ちでもないでしょう。全てが反対です。理想的な都市を想像するのに役立つ二つのタイプの生活がここにありません。両者の間で私は迷うことはありません。申し分のない社会が、大工場のようなものであると私にはどうしても思えませんでした。

（一九〇七年二月二六日）

三十三 美術館 (LES MUSEES)

私は美術館が嫌いです。美とは見なくてはいけない何かであると思われましたが、じっと見るのではなく、働いている時や用事をしに出掛けている時に、眼に這入って来て一寸注意して見る何かです。例えば、もしもきれいなカップでコーヒー飲んだなら、食事の間に草原や樹木の新鮮なイメージを町の真ん中で眼の前に持つことです。あるいは雪が降っている間に夏の暖かい色彩を見ることです。椅子に座り、そして木彫の有名なキマイラの怪獣の上に自分の手を添えることですが、沢山の手によって少しすれ切れています。出掛けて美しい時計の時刻盤を眺めること、急いで裁判所の中庭を横切ること、雨が降るかどうかわかるために空を見上げること、そして笑っているように見える怪奇な雨水落としの像に出会うこと、前に進むのにつれて美しい遠近法の変化を見ること、交叉アーチが相交わり一つの塔が他の塔の背後に高く聳えていることです。それらは全てが楽しませてくれますが、そのことについて思考することはありません。反対に、他の思想の基本となるものや緯糸がそこに作られたなら、私は美的喜びに精通するようになります。

しかし、美術館では前進を余儀なくされて、家具の無い大部屋を立ち去るのです。その中では或る種の明細目録が作られています。入浴している一人の女の作品から、もう一人の女の作品へ移ります。おじいさんの肖像画、金色のシーツのような平原、太陽の沈む空、本を読む女性、笑っている男性、祈っている修道僧、仮面をしている女性、花束を持っている女性、手袋をしている女性、馬たち、のろ鹿たち、果物の籠と大鍋に同じ様に大きな感動を覚えます。そして、携帯品預り所で自分の雨傘を受取り、その後で感情と思想の間の調和を少し取り戻したように語りますが、美術館へ行くことは、北風が吹いている時に暖かい衣服を着ようとして店の中へ這入って行くのと殆ど同じで、次に寒くないよねと言いながら軽くなった気持ちで散歩するのと同じでした。

(一九〇七年三月十日)

三十四 起源の光 (LA LUMIERE DES ORIGINES)

全ての生き物の始まりは魚でした。それはソクラテスよりも前に既に分かっていた命題で⁽¹⁾、今日では極めて本当らしい仮説として採用出来るものでした。

真実としてその仮説を信じましょう、でもそこから色彩や情熱についての影響に関して、多くの結果を導くこととなります。

もし生き物が海の中に最初に生きていたとするなら、初期の静物の眼は水の中で開かれています、つまり海の水が通過させない赤い光から保護されています。大変に明るい海の洞穴の中にある底の方を見てご覧下さい。その色彩は緑色や青色の豊かな色調をしており、その時はあなたは「起源の光」という観念をあなたに与え得る落ち着いた優しい眼をしています。

その後、多くの動物たちに災難が起き、取分けそこは泥となり、つづいて乾いた大地になって、次に諦めて多くのものを受け入れました。例えば赤い光を見ることがあります。しかし、そのことは苦痛がなかった訳ではありませんでした。今日では、私たちは赤色を原色として特別に見ています。

私は近頃、今は無名ですが将来有名になると思われる或る生物学者⁽²⁾と会ったことを次に言わねばなりません。それは私が一寸触れて言ったことですが、あなたは十分満足することと思います。彼と別れてからも、私は自問しました。

雄牛が赤いスカーフに興奮するのはそのためです。赤い光線で働いている写真のアトリエの労働者たちが他の職場の人々よりも活発に口論するのもそのためです。青色が幸福のシンボルで、緑色が希望のシンボルであるのもそのためです。そして、不幸を齎した愛によって打ちひしがれたファイドラ⁽³⁾が震えながら、次の様に叫んだのもそのためです。「神よ、私は何故あの森の陰に座らなかつたのでしょうか」。

哀れなこの女は優しい起源の光を望み、鱈や舌平目の素朴で簡素な光を望んでいるのです。

(一九〇七年三月十六日)

(1) 小アジア西岸ミレトスの物理学者で哲学者のアナクシマン드로ス(紀元前六一〇頃~五四七頃)を指している。

(2) ルネ・カントン(一八六七~一九二五)は、一九〇四年に『海水・機体環境』を出版した生物学者(又は生理学者)で、海水と有機体内部の成分類似を指摘した。アランは一九〇七年三月六日にザヴィエル・レオン氏宅の夕食会で、カントンと出会っている。

(3) ファイドラは、ギリシア神話でテセウスの妻。義理の息子ヒッポリュトスを愛し、自殺する。

三十五 自由思想 (LIBLE-PENSEE)

偉大なベルトロ (1) の死に際して、沢山の〈優秀な〉人々が宗教的権威から独立した〈自由思想〉を彼らが話すのは確かであるにせよ、それは面白半分です。〈自由思想〉はもう流行りません。お上品で気障な男たちがそうしたのです。

まあ、彼らにはお上品に笑わせて置きましょう。鈍い人間たちと見倣すのは諦めましょう。でも彼らは平民たちであり、私たちのささやかな基本を繰り返しましょう、それは私たちの祈禱のようなものであり、ロザリオの祈りのようなものです。

私には三種類の検討すべき真実があります。人が私に語るもの、人が私に見せるもの、人が私に証明するものです。

人が私に語るものについては、一つの規則しか私にはありません。もし自分自身で確認するとしたなら、疑うことです。この規則は歴史の場所を塞ぎ、歴史に代わるものを見直します。私たちは現在を生きているのです。過去の中に生きる者も私たちの中や周りにおります。残骸というものは鼠にとって良いだけです。過去のフランスが何であったかを知ることはありません。少なくとも現在のフランスが何であるかを知るために仕事をして下さい。あなたがゆっくり時間をかけてやるのはそのことです。

その上更に、私は歴史を疑ってかかればなりません。歴史は短い物語が増大したもので、激しい感情によって変えられたものです。幾つもの逸話であり、そのことに価値があるのは正確無比で微笑しているものです。

私が目撃者となる事実に対して、守るべき規則は単純です。私が何度もそれを再現しようと努めるか、人が何度もそれを再現するように私が要求するかです。もし私に示されるのが天井まで達する洋服ダンスとか私の髪の毛を引っ張る幽霊であったなら、「やり直さない」と私は何時も言います。そして、もしも人がやり直さないのなら、一つの歴史や幾つもの歴史による出来事を各自の勝手な主張と考へて、そのことについて最早考えません。一人の人間の人生を書き記すためには、調べるべき出来事が余りに多くあります。

結局のところ明するためには、人が考え始める分かり切ったところを私が良く吟味する時、言葉の意味が途中で変えられなかったことが確かであると私が思う時、全てが調査された時、私は最早何も異論の余地を挟まず、それは正しいことであると何時も言います。証明は何時も何かを仮定します。証明は「もしも」を吊しています。私がそれを外すのを妨げるのは誰でしょうか。

(一九〇七年三月二六日)

(1) マルスラン・ベルトロ (一八二七～一九〇七) は、化学者で政治家。有機合成やエステル生成実験を行うとともに、熱化学の分野にも貢献した。文部大臣や外務大臣を歴任した。

そのモラリストは私に言いました、「勿論、そこには高邁な人生と美しい死があります。そして、力強い人々は全てその〈精神〉に敬意を払っていて、パンテオンの霊廟に祀られるに相応しい光景がそこにあります。というのもそれはまさに〈神〉に還っていった〈神〉であるからです。しかし、一つの事象が私を驚かせますが、その強い精神は決して神の永遠を感じさせるものではありませんでした。人道主義以上のものを見ませんし、死以上のものではありませんでした。人生の意味とはそれ故、偉大な何か欠けているのです」。

私は彼に言いました、「人間には二種類の間があるに違いありません。というのもあなたが今言ったことを、私は理解していないからです。屢々それを理解したと説明されても、間違っただけです。熱意も又、間違っただけです。私を異邦人にしないで貰いたいのです。でも、あなたが言っていることは、私を異邦人にしているのです。私は絶対に死後を生きたいと思いませんでした。絶対にそれを期待しませんでした。絶対にその考えを持ったことはありませんでした。

十歳の時に、私は清い気持ちでミサに臨みました。そして、悪魔がとても怖いと思いました。私は活発に想像力を働かせていたのです。司祭は私を怖がらせる幽霊の話をしました。私は孤独と夜を怖いと思いました。そのことは信仰心を私にとどめました。今ではその時のことを、私は十分に良く理解するまでになっていますが、恐怖を怖いと感じていたのです。幼年期を過ぎると、それは私から離れて行きました。そして、恐怖が肉体的恐怖だけになると、私の宗教心は消えて仕舞いました。

その後、私は男や女たちの死を理解しました。何時も仕方の無いものとして、私が死を受け入れて来なかったことを信じて下さい。しかしながら正直に言いますが、死者たちが何かの姿になって存在することが出来る、と私は今も一瞬でも信じませんでした。死者たちはその存在を終えたのであると全く単純に信じていました。そのことは私を苦しくさせましたが、自然であると思いました。そして、私は自分の存在についても同じ考えでした。私が存在しなかった時は沢山あったのです。私が最早存在しなくなる時も、沢山あり得るのです。自然そのものがそのことを私に教えてくれます。私が眠っている間、私の存在も消滅している様です。死は、終わりの無い眠りです。私はそれが悪であり乱れていると考えることはありません。本当のことを言うなら、全て何でもないことであり、私はそのことについて全く何も考えていません。しかし、私は孤独ではありません」。

(一九〇七年三月三十日)

宗教は良く出来ていて、全ての人々が同じ目的を目指しているのです、私はびっくりしています。復活祭の祝祭日を考えて見て下さい。それは悲しい苦難の後で、最良の希望が信者の魂に目覚めるに違いありません。かくしてそれを要求しているのは、キリストの苦悩や受難や死や復活です。

しかし、もしもこれらの古い歴史が信者たちを悲しませたり喜ばせるためにしかなかったとしたら、復活祭の祝祭日は湿った花火に良く似ています。どんな代価を払っても、問題は魂が興味を持つことであり、そこに到達する最良の方法は人体という有機体に抗うことなく行動することが今でも重要です。それ故に、それらの古い歴史は月や昼夜の時間が同じ春分の日に沿って復活祭の祝祭日が決められ、太陽が体を暖め始める時期に、絶対的に魂がまさに喜びを与えられたやり方で決定されました。この様に季節は味方し、世界中の自然は復活祭の鐘の音鳴り響く時に歓喜に揺さぶられます。

その祭りの催しは最後の細部にまで調整され、少し刺すような北風が一週間吹いた後に行われることは、大変に良くあることで、太陽が登場しなくてはならない正にその時に登場します。今年はいさぎよく早すぎて舞台に登場しましたが、この様な小さな汚点は珍しいことです。

しかし、胃にも影響を及ぼさなければならないものは、喜びや悲しみを基本的には左右させるものです。そして、魂に影響を及ぼす尋常で無い芸術が眼に見えてそこにあります。真鱈や燻製練漬の四十日間は、焼肉を食べたいと思っている人々に一層の節度を必ず与えるに違いありませんし、同時にそれは内面の渇きでもあり、そのことは魂に不安な感情と礼拝の言葉とがすっかり一緒になって調和することの期待を生んでいます。

祭りは遂にやってきました。そして、正に程良く美味しくなった新しい果実酒が出来上がり、全てが呆れた酔っ払いのために準備され、その時は正に各々がなるべき者になります。詩人になったり、リウマチ患者になったり、恋人になったり、酔っ払いになって、誰かに感謝したい気持ちを抱きます。

この様にして魂の活動が目覚め、持続し、強くなるのは肉体的変化によってです。少なくとも単純で素朴な人間はこのことを知りません。そして、彼らは自分の喜びの本当の原因を知りませんし、自分に喜びを与えるのは司祭の言葉であり行いであると信じています。その様にしてあらゆる宗教が形づくられています。

(一九〇七年四月五日)

三十八 (子猫たちの公平さ)

猫が好きで沢山飼っている人が、次の様なことを私に語りました。母親の雌猫が二匹の子猫を育てていて、猫として生きる術を教えています。それは主に二十日鼠を捕まえることにあります。従って、母猫は二十日鼠を捕まえて、半殺しにして子供たちの前に放り出したのは、機会を窺い、襲いかかる訓練をさせるためです。子供たちは二匹だけですが、この狩は一匹だけで行わなければならない遊びです。母猫は、子猫のうち一匹に先ず二十日鼠を与え、続いてもう一匹にも殆ど同じ様な機会を与えます。二匹のうちの一匹が遊んでいる間、母猫は遊んでいないもう一匹の方を監視します。公平さの決まりを守り、力のある上の権力者の庇護で自分の情熱と闘う子猫を見るのは、最早喜劇でしかありません。

猫たちには公平の観念というものがある、とそこで結論付けるべきなのではないでしょうか。恐らく、そうではありません。寧ろ猫たちは命令と平和以外のものを求めようとせず、喧嘩をせずに公平さ広めるための準備をしているのです。母猫が先ず最初に二匹の子猫に二十日鼠を任せたことはありそうなことで、二十日鼠と猫たちの争いが、猫と猫の争いになることもありそうで、猫族がこの世で発展し勝利するには有害でためにならない争いであり、母猫が本能的に止めさせなくてはならなかった争いです。それは最も単純な方法によります、つまり暴力によって、次に脅しによって兵士の一人を動かなくさせることです。

ところで母猫は、如何にして子猫たちを順番に各々遊ばせて、少しでも殆ど同等の時間を作るようになるのでしょうか。二匹の子猫の疲労や休息が、自然とその決まりに従うようになったことが分かるだろうと思います。というのも二匹のうち一匹が遊んでいると、順次もう一匹が遊び、一匹が休息しているうちにだんだんと脅しや闘う気持ちが強くなってくるのに反して、もう一匹は成し遂げた労働の成果によってより従順な気持ちになってきました。そして、その時は恐らく、母親の猫が一方の子猫を止めておくことは、他方の子猫を押さえることよりも苦勞しないで済む時でもありました。この様にして猫の王国に公平さが生まれるようになったに違いありません。

(一九〇七年四月十二日)

三十九 (団結心)

中等教育の先生方はこの頃協議会を開いています(1)。もし公平な傍聴者が討論会場に這入ったなら、団結心だけであることがはっきりと分かります。

もしそこで用心しないならば、全ての機能は個人を歪めます。もし公務員の言うことに耳を傾けたならば、尊敬の念を抱いているに違いない指導者や形式的手続きのことしか話さないでしょう。町や田舎を見て理解するために、何時も同じ一点の場所に身を置く人間に似ています。或る種の目的は大きくなります。その他の目的は小さくなり、消えて仕舞います。そのためには救済策しかありませんが、それは他のものを見て理解するための地点を探し回ることです。賢者が自分の仕事を特に恐れ、それが自分の仕事に関する偏見を恐れる理由になり、自分と同じ仕事に就いている人々の気持ちを求めることと大分違って、反対に逃げております、寧ろ自分のものとは違うものに興味を持っている人々と語り合っています。この様に旅する知識人のように出来ることが多くなればなる程、彼は様々な表面的出来事を基に社会を調べ、最良の物が無ければ他のもので間違いが修正されます。

従って同業組合的演説よりももっと良い判断はねじ曲げられて行って何も無くなります。この場合、単に個人が物事の正確なイメージを見るための確かな遠近法を手に入れるのに危険を冒すばかりでなく、他人の称賛によって幻想も増大していきます。というのも評価に関しては小さな相違があり、詳細に見ると様々な間違いがあるからで、それは細心さを眠らせ、最終的合意が真実を決めていると信じさせていますが、その時はその様な合意が必然的に同業組合の間違いを明らかにしています。

良く見てみると、似た様なこれらの利権同盟は平常心を失っていて、戦争を準備します。平和であるためには、集団はばらばらにして混合されなければなりません。丘の上に十万人のドイツ人を集めてご覧なさい。その正面には十万人のフランス人です。彼らは戦うことになるでしょう。同じ人間を同じ町の中に混ぜ合わせて交流させたなら、彼らは平和に暮らすでしょう。結束というものを信用してはなりません。

(一九〇七年四月十三日)

(1) 一九〇七年四月上旬に、パリにあるリセのルイ・ル・グラン校で全国公立中等教育学校教員連合の大会が開催された。小学校教員の労働組合連合と違って、非労働組合で全体的に非政治的な会であった。

四十 (自殺のメカニズム)

兵舎の部屋を閉鎖したのはそこで人々が自殺をしたからです。哨舎と呼ばれて有名ですが、その中で公務員が全員首を吊ったのです。この種の出来事は、機械人間と呼ばれることに注意を促しておりますが、科学は未だ黎明期にあり、通常の機械はもっともっと便利になることでしょう。

先ず初めに、或ることを話しましょう。それは自殺が自然に感染するということであり、私はその事例を知らない限り、その様な行為は超人的であったり人間以下の行為であったり見えます。自殺を成し遂げるには、小説の英雄か狂人にならなければならないと思っていました。私が良く知っていた人は、私が見たところによれば、狂信的でも衝撃的でもなく、些細な悲しみや悩みのために自殺していたことが分かった日まで、私が抱いた考えはそのようなものです。その様な事件が証明していることは、自殺することはそんなにも難しいことではないということです。その上、もし私が何かの理由から絶望するようなことになって、手許に弾丸が入ったピストルがあれば、明日の新聞に十行の死亡記事の原稿を書かせる危険があるということです。

住んでいる場所の影響も大きいと思います。取るべき行為の観念が想像力の中で或る状況と深く関係していると分かるや否や、それらの状況は時計の仕掛がベルを鳴らすように、確実に行為と結びついています。私は上着とチョッキを変えたいと思います。機械的に腕時計を見て、ネクタイを外します。まるで眠りに着くようです。ここではそれは極めて強く習慣になっていて、その行為は状況と結びついていましたが、生き生きした印象は同じ効果を上手に作る事が出来ます。

もしも私が、自殺したばかりの友人の一人の死骸を或る場所で見つけたなら、その時はその場面を再現するために、私は想像力の中で自殺します。そして、私が元気に生きているものとして、自らの意志で死んだイマージュがこの友人の死骸やベッドや部屋のイマージュに結びついているのが分かり、従って周囲の状況の一部は残りの全てを呼び起こすのに十分です。結局、私がそのことを認識するのは、その行為を私が考える時です。

更に、恐れることなく出来事をこのメカニズムに任せ始める者は多分、独り言を言って場面の続きを見ることになるのでしょう。まさしくそこには成すべきことは無いということです。時計の仕掛が動いていた時、最後には時間のベルが鳴らなければなりません。

(一九〇七年四月十四日)

小麦や甜菜で大地が一杯になった高原は、規則的なぎざぎざがある断崖があって突然に終わり、その足元には大きな谷が広がっていました。断崖の各々の歯に当たる中程の所には村の家々が一列に並んでいました。屋根が尖っているのは教会です。詩人が私に言いました。

「これらの各々の村の家に沿って、一本の道が小ざれいに伸びているのは驚きです。まるで私たちの眼を魅了するために、調和のとれた計画で全て造られてきたようではありませんか。そして、村の外れの良く見える所に空を見上げるように教会が建っていますが、そこのあるべき所にあるという感じで、全てのものが何と意義深いことでしょうか」。

私は彼に言いました、「詩人であるあなたは詩人でしかなく、常に目的という観点の側からあなたが探求している思想は、そこにはありません。それ故に原因という観点の側からもあなたは探求していただくことです。

これらの村は、決して自由な選択で造られているのではなく、全ての家が太陽を計算して建てられております。もしあなたが細かく物事を見たならば、山の中腹に鎖状の家々の始まりを見て理解します。人が家を建てねばならず、そして実際に建てたのはこの丘でした。下方に住んでいる者は汚れた水しか使えず、不健康なものでした。上方に住む者は全ての水を手に入れる訳にはいきません。

教会について言うなら、その建物は農家でも納屋でもない場所になければなりません。何故なら農家や納屋は小麦畑が広くなければ、それだけ自然とお互いが接近してくるからです。それ故に教会を建てるための場所も一カ所しかなくなってきた、断崖の端に建てることになります。そして、あなたはその教会を見ているのです。

あなたは肩を上げ、それは仮説の一つであると私に言います。私は白状しますが、実は、私も詩人です」。

（一九〇七年四月十五日）

四十二 (チップ)

チップに不快感を抱くのは、それが物の値段ではないからです。誰かに請求されたり申し出があって決められている値段ではありません。チップは喜びを与えることによって決められる人件費です。そこからは同じ様な難しさが周期的に生まれ、そして繰り返し行われます。それは身に付けている習慣が決めることではなくて、持って生まれた性格が決めるものでさえあります。

一杯のコーヒーは常に一杯のコーヒーですが、小さなベンチを持って来たり、外套や帽子や雨傘を持って行ったり、サービスには何と色々なやり方があり意味合いがあるのでしょうか。ボーイは各々のお客の要望を見抜かなければなりませんし、お客の言いなりです。というのも或るお客は構わないで静かにして置いて欲しいと思いますが、他のお客は色々なサービスを大変多く望んでいるからです。そして、ぎこちない腕を通して助けて貰ったり、ほんの僅かな会話が無くても満足しません。チップはそれら全てに対して支払います。ですからチップは曖昧な性質のものではなくて、制限が無いだけです。

色々な主義があること、平均的なものの中に或る確かなものがあることを無視して、少なくとも経験だけによって理解します。そして、競争原理で自分を鍛えるために全て同じ心遣いで対応するのもこの時です。テーブルに座った各々のグループの合計額が示されますが、プロの人々は大変早く算出します。これらのテーブルに座っている人々は、直ちに株式市場の株価のようにその金額を交渉します。公証人の権利や競売人の職を買うようにお金を支払います。チップによる賃金が思ったよりも少なければ、それだけのサービスしか主人にしてあげません。やがて相手はチップを支払いに来るか、その一部の面倒を引き受けるためにやって来ます。この様にしてチップの相場が決まります。店の主人は、チップを料金の一部として徴収することはあってはならないのです。それは本当です。実際には最も良くチップを貰える場所に関して入札をします。その人は物の値段を引き上げはしませんが、実際には全てその様にしてことが上手く進みます。店の主人は商人です、彼はお客に飲み物を売り、ボーイにはテーブルを売りますが、出来るだけ高く売ります。ドアマンや御者たちの間でも同じことが行われており、基本的には仕事への熱心さや礼儀正しさに対して、至る所で支払われる臨時収入です。従ってこれらの無制限の報酬は、最低レベルに自動的に落ちることさえあり、誠心誠意の心遣いが義務化することになります。その結果、厳正なサービスに対してチップが支払われなくなっており、その点について怒っている人々もおります。

(一九〇七年四月二七日)

暑さから寒さへ、あるいは寒さから暑さへの季節による突然の変化がある度に、この変化を私は一番重要な歴史的事実と見做します。

工業や商業における変化が如何なるものか考えてみて下さい。旅行者たちは季節に合わせて燃料を購入し、フェルト帽から麦藁帽子へ変えます。季節は農作業や収穫量を変え、大河の状況を変え、人々の気質を変えます。大雨は暴動を阻止し、大収穫は現状の制度が気に入るようになることを、誰もが知っています。ワートルローの戦いの日の前日には雨が降っていて、そのために大砲が弾を発射するまでに非常に時間がかかったことも誰もが知っています。そこから多くの結果が生まれ、私たちは再度幾つもの結果を経験することになります。

もし私が歴史を書いたなら、緯糸には気象学的事実、収穫量、輸送上の統計そして出生率の変化を挙げることでしょう。その時、私は物事の原因の鎖と向かい合っているでしょうし、その行為は確実に優先され、私はそこに歴史の本質を既に読み取っていました。

散歩の時に突然に雨が降ると、何が起きるのか私は大変良く知っています。群衆は何はともあれ逃げ去ることでしょう。しかしながら私は、逃げるこれらの人々を全て知っていません。彼らの性格や企みや葛藤には無知です。例え私があああの明るい色の服を着た太った婦人の行動の軌跡とか、傘を持った慎重な男性の行動の軌跡とかを予想したいと思っても、私は裏切られる危険があります。しかし、私は一団となった群衆の動きを予め予想することは極めて十分に可能であり、そうである以上一つの同じ原因が全てに影響を与えることになります。

従って人間の歴史を解く鍵とは、彼らが存在している惑星の歴史です。水は斜面を流れます。重大な原因を知ろうとする歴史家は、小川の水が流れるように民衆の行動が行われることを見るでしょう。

(一九〇七年五月十九日)

四十四 （信仰は慰めにならない）

私は最近或ることを証明する機会を得ました。それは宗教上の信仰は人生の苦難に耐えるために、左程の助けにならないということです。私は、或る敬虔なカトリック信者である女性から亡くなった彼女の父親のことについて話を聞きましたが、まるで父親は記憶が最早何も残っていないかの様でした。

私は間違いなく、彼女が喜びを手に入れたことを期待しませんでした。しかしながら、敬虔な信者は〈神〉に感謝する義務を負っているように私には見え、その時、神が愛する人々は人生の悪を免れることになるのでしょうか。しかし、修道士たちの心の裡を除けば、正にそれは決して理解されないことです、何故なら修道士たちの処世術とは、だんだんと全てのものに無関心になることだったからです。それなのに私は、修道士たちの例外的な場合の外に、病気や死という結果を生じる辛い出来事に対しては何か和らげるものを齎す信仰しか分かろうとさえしませんでした。信者たちは絶望のどん底で爆発した後、疲れ切って茫然自失に陥っても殆ど何時も彼らは再び立ち直って生活し始めるのを私は知っています。しかし、彼らは同じことをやろうとは思いません。私がかかっているところでは、原因が同じなら結果も同じになるからです。というのも疲労と悪い習慣は二つとも、最も激しい道德上の苦痛を眠らせて鎮めることによって治まるからです。

理性の働きは私たちの苦痛を和らげて慰めると信じられています。実際には反対のことが行われています。慰めは最初にやって来ます。敢えて言うなら、慰めは基本的には胃からやって来ます。何故なら、喜びの主要な原因とは健康であるからです。理性の慰めはその次にやって来て、物事に叶った展開を与え、気高い理性によって友人たちへその事を説明するのは可能です。或る人は子供のために生きたいと言うでしょうし、他の人は自分で勉強して人々を教育したい、他の人は貧しい人々を慰めたい、他の人は神の意志に従いたい、他の人は亡くなった人と天国で再会することを熱心に期待します。これらの理性は全てが同じで優劣がなく、その意味においては本当の苦悩に対してもあれもこれも全て同じで何も優劣がありませんし、理性は苦悩から諦念までの移行を全く同じ様に上手に行います。しかし、慰めになる話を強く望むことは、結果を原因と見做すことになります。人は議論によっても眠りますが、それ以上に最早、理性の働きによって自分を慰める訳ではありません。少なくとも慰める話は長くなる必要があります。

（一九〇七年五月二七日）

高位聖職者の顔に新しい仮面を付けて交霊術が舞台で行われるのを見る度に、私は哲学者や自然科学者の間で評価されている或る重要人物が語ったことを思い出します。それは現象を観察する前に、常に眼が涙で曇らないようにして置くことです。

彼は、他の高名な学者たちと一緒にその場に居合わせていましたが、そこでの経験は家具に触れることなく動かすものでした。何時ものように舞台上には沢山の幕があり、明かりは僅かです。人間の精神は固定観念に捕らわれますし、それらに逆らわなければなりません。その哲学者はその場から動けずにじっとしているだけで、若い子馬のように程なく飛び跳ねるように扱われる腰掛をじっと見詰めながら、何が起きても良いように他のものを見ないように自分に言い聞かせました。

ところで、その家具をじっと見ている限り、何事も起こりませんでした。但し、不本意ながら、明るくなった時に霊媒師の方に眼を向けました。彼が認めることが出来たのは、その家具を監視していたことでしたが、その時に奇跡が起こりました。

「それは如何なる風に起きたのでしょうか。どんな風にその腰掛が舞台上からさっと消えて持ち去られたのか、それを説明することが私には出来ない、と彼はつけ足して言いました。しかし、私が確認したのは自分では十分でした。その現象が起きたのは、丁度私の注意力が散漫になって、もっと遠くを見ていない時でした。私はペテン師の業を眼にしました」。

しかし、既にそれは私の感覚にとって酷すぎました。真面目な人間には腰掛とかテーブルを窺って見守るための二時間は無駄な時間でした。私としては調べることも出来ず、状況も変えられないものを観察することにはとても同意出来ませんし、観察に必要な道具や、長さや重さを測定するための計器の使用も許されていないのです。私の精神を釘付けにして納得させるためには、手で触れて確かめられ、測定が可能で不変であることがかなりあり、実際にそうなった時に人々が話していることを理解したいと私は強く望みます。

ここに滑車が一つあり、あそこには梃子が一つあります。私はそれらの長さを測定し、重さを量り、それらを回し、幾通りものやり方で働かせて、速さや仕事量を測定することが出来ます。しかし、これらを単純化したシステムとして遊ぶ能力を理解するまでには未だ程遠いです。そして、高位聖職者が私の処にやって来て、幾らでもある〈未知の自然の力〉のことについて話す時、私はこの滑車と梃子を彼に指さして、全ての回答に代えます。

(一九〇七年五月二九日)

四十六 （公務員は退屈する）

私は或る公務員と知り合いです、彼は自分の仕事に対しては殊の外真面目で几帳面であり、高度な仕事の才能にも十分恵まれています。彼は公式行事の式典に決して出席しません、何故なら彼が言うところによると、全てが退屈であるからとのことです。私は最近、彼に少し小言を言うことが自分で抑え切れませんでした。

私は次の様に彼に言いました、「儀式があなたには退屈であるということは、おっしゃる通りです。あなたが退屈しなくても、何も成し遂げられません。大臣や長官たちを良く見てご覧なさい。彼らが過ごす時間は、要するに退屈するためのものです。彼らが働いているのはこのためである、と私は考えます。ところであなたのことですが、あなたは公務員としてこの種の仕事をを行うためにいるのです、何故ならあなたは飾りであり、退屈であることはあなたにとって都合が良いからです。退屈はあなたに高貴で堅苦しい雰囲気を与えます。少なくともあなたは笑ったり、面白い話をする方が好きです。同様に共和国もあなたに何もやってくれないでしょう。

別の日に、トロカデロ宮で大臣が教育について女性の教授たちと話をしていました。彼は、老人や退屈している人々が増えているのを繰り返し言っていました。小オペラの代わりに、家具付き部屋で踊り手たちは堅苦しい正式のシャツを着て昔ながらの退屈な踊りを踊っていました。そして大臣は踊り手、踊りと洋服、女性の教授たちにうんざりしていたことをあなたは直ぐに考えますが、大臣は何も顔に出さず、決して欠伸をすることもなく、微笑を浮かべて白い手袋を嵌めた両手で慎ましく拍手していました。あなたでしたら、そこにいなかったでしょう。それではあなたは優れた人物の仕事の何時学ぶのでしょうか。

その数日後に、ソルボンヌのパリ大学はロンドン大学の客を迎えました。そこにも殆ど同じ公務員たちがいて、全く同じ洋服を着ていましたが、この時はペチコート姿の女性も少しおりました。何故なら、ソルボンヌはトロカデロ宮ではないからです。ここでも家具付き部屋で講演がありました。そこにもあなたはいませんでしたね。

あなたは笑っています。あなたが言うことを当ててみましょうか。ロンドン大学というのは実際にはなく、本当の校名は組合に組織された寄宿学校の先生方よって付けられたもので、その会には哀れなオックスフォードやケンブリッジを微笑させて気に入られていること、この度パリ大学に大統領に代わって一人の管理者が就任されたことです。えっ、そんなことは構わないのですか。それでは裁いたり評価する習慣をなくして下さい。真面目になって頂きたいのです。真剣に退屈することです。身に付く料理講座を始めて下さい。兵舎となる最初の石を敷設して下さい。ブ

ロンズ像となった化学者、大理石像となった歌手あるいは石膏像となった歴史家を称賛して下さい、彼らの態度は何時も同じです。もし別の人々が話をするなら、真剣な表情で頭を下げて聞いて下さい。金色の縁飾りの付いた赤いピロートの服を着た人々や正式な挨拶の美辞麗句の花模様には敬意を表すことを学んで下さい。半分は主任司祭に、半分は憲兵に似ている雰囲気をあなたが探ることになる時、あなたは今よりもっと高級な仕事を手がけるための機会が熟するようになるのです。あなたは週に一度、十時から正午まで請願者の列と対応することに集中しなければ

ならなくなるのです」。

(一九〇七年六
月二日)

四十七 (社会学者の解答)

〈葡萄栽培の危機〉(1)に対する解答を探りながらも見出さないうちの私は最近、社会学者の中でも最も有名な人の家へ鉛筆を持って赴きました。社会学者は社会のために存在し、医者個人のために存在していることは誰もが知っています。只、彼らの認識の延長として、悪いものを良く知ること、それらの原因を把握すること、その薬を示すことは出来るかもしれません。

私とその社会学者を訪ねて家に這入った時、彼は取るに足りない書類を見ていましたが、二つの眼鏡を重ねて鼻の上で直して、禿げた頭を上げました。というのも彼は酷い近眼なのです。

床から天井まで彼の周りは至る所が本棚で埋まっています。足元の床には雑誌が積み重なっています。彼の傍らにある机の上にも雑誌や書物が何冊もあります。そして、私が見たのは愛情のない冷たい視線で私を見詰めている恐ろしい読書家でした。ですから私は、「親愛なる先生」と言ってから、質問を全く手短かに言いました。

彼は手にペーパーナイフを持っていましたが、まるで自分の話を細かく切り抜くかの如くでした。彼は私に言いました、「私はあなたが話した問題を特別に研究した。様々な観点から考察し、歴史の中で変化したものを注視して、誰よりもそのことをよく知っていると言うことさえ可能である。更につけ加えて言うが、私はそれに付随した大問題についても研究したから、あなたやあなたの読者の疑問を明らかにすることも出来る。それでも私は一言では言わない。一言で言わないということが、私の方法にとって必要なのだ」

「親愛なる先生、一言では駄目なんですね。それは何故ですか」

「何故なら、その問題については私はまだ二冊の本を読んでいないからだ。一冊はニュージーランドの自然についての報告の中で、道徳と共に生産過剰について書かれている。他のもう一冊は原文の研究書で、特に原文が大幅に破損していたのが葡萄栽培に関するディオクレティアヌスの法令である。私がこの二冊を何度も分析したのは言うまでもない。しかし、十分ではないのだ」

「オセアニアの人々やローマ帝国の人々のことは、この際関係がありません。南仏のベジエ(2)の葡萄栽培者の人々のことについて話して下さい」と私は言いました。

「いいえ、そうではない。そうではないのだ。私は近くのことでも遠くのことでも、書物や雑誌や新聞記事であろうと、全てのものを何でも読まなかったなら、或る任意の主題について如何なる反対意見も示されず生まれることさえもない法則を私は自分で作るのであり、その限りにおいて主題は関係ないのだ。私はジャーナリストではない。社会学者である」

(一九〇七年六月六日)

(1) 葡萄栽培は、南仏のエロー県、オード県、ピレネー・オリエンタル県では殆どが単作であった。危機は、アルジェリア産の葡萄酒や不正行為(葡萄酒の加糖や水で薄めること)による競争が原因で、長い間くすぶっていた。しかし、一九〇五年と一九〇六年の大豊作後に、価格は暴落し、状況は爆発状態になった。一九〇七年五月から強力な民衆デモが、ナルボンヌ、ベジエ、ペルピニャン、カルカソンヌの町で大きくなっていった。

(2) ベジエでのデモは、乱闘騒ぎになっていた。

四十八 (時間の価値)

時は金なり。私はこの格言が意味するものについて昨日、巨大な石の周りを囲んで働いている三、四人の労働者を見ながら考えさせられました。それはこの世で最もゆっくりやる仕事で、ジャッキやローラーや鎖やウィンチ（巻揚機）の助けを借りながら、一時間にせいぜい三、四メートルの速さでその重い荷物を目的地へ向かって運んでいました。しかしながらこの石は、確かにがんとして動きませんし、多くの人の方が要ります。石があるその家は竣工し、賃貸し、人が住んで幾日かになります。鋼鉄のレールをノコギリで切ったり、分厚い鉄の仕切板に穴を開けているその家を、私もじつと忍耐強く観察しました。彼ら労働者たちは皆、恰も時間はこの世で一番安価で節約する必要がないものの如く、たっぴりと時間を使って正確に行動します。

実際問題として時間を稼いで早くやることは、大変に高くつくものです。速さは法外に高価です。どんな運搬であろうと二倍の速さでやるためには、誰もが分かっているように四倍かそれ以上の労働力がなければなりません。三倍の速さでやるためには九倍かそれ以上の労働力がなければなりません。例えば一時間に一つの場所ではなくて二つの場所で作業するには四倍かそれ以上のエネルギーを消費しなければなりません。従って、エネルギーは本当に高価で、時間を節約することは贅沢なことであり、常にお金がかかります。

現実に速さにはもっと他の不都合があることを除いても、速くするには幾つもの歯車を使いますし、事故に繋がり、とても複雑な安全装置が必要になります。そして停止することも何よりも高くつきます、というのも時間を節約するために速く走っていて急停止するからです。ブレーキからは火花が発し、タイヤは道路を掻きむしり、自らを消費させます。

以上は速さを求めている人々は、全てが被害を被る理由になります。スピードを速くすることは会社に損害を与えます。大きな外観の自動車は特別な害を与えます。時は金なりです。そうです、その意味において時間は大変に高い価値があります。今まで以上に高価になり、転売することも出来なくなり、その意味で速いことに価値のある労働を使い捨て製品のような形をとったのでは、決して元を取れないだろうと思います。労働における経済的な最高の決まり事とは、可能な限りゆっくりとやることです。速度に関する私たちの愛は、恐らく物事を良く解明していますし、取分け豊かさは消費したエネルギーと同じ速さでは決して増大しないでしょう。

(一九〇七年六月十四日)

民衆の心を論じる機会の良いもので、神秘的進展以上のものを生んでいます。これらの活動に関する同意や活力は個人以上の存在を示し、一人ひとりには既に意識と意志を持っており、それは共通の意識であり、共通の意志です。そして、私は社会意識を確立する社会学を知りましたが、それは市民のためにあるもので、私の手足になっている意識のことです。そのことは社会学が既に、文学ときれいに分離されないことを全て証明しています。

私たちが出来事と向き合う時、最初の理解は精神に齎すものであり、最初の理解というものは疑って注意して見ることを前提とすることが先ずないものであり、そういうものです。注意して見ることは自分で望んで見ることであり、つまり或る目的が自分に持たされていて、一連の方法をこの目的に向けることです。存在しているということは人がそう望んだことであり、ある時は事物と同じで堤防を砕くことを望んだ急流のようなものであり、又ある時は眼に見えない何らかの〈神〉というものが物事とか管理を作ります。例えばジュピターは雷を放ちます。

これらの理解は、全く何も説明していないことに気付くべきです。物事とは私が物事の状態を知った後に予想することが出来る時に理解されるもので、更にもっと正確に言うなら、物事の状態を知った後に計算が出来ることです。従って、私が足し算をやって合計を出して数字を書く時、二十ばかり余分に間違えたとしたなら、その間違いは完璧な知識と共に結果によって自分が見出すものであることを私は予想します。同様に、もし私が百の歯を持つ車輪を十の歯を持つ小歯車の上で回すなら、完璧な知識と共に車輪が一回転する間に小歯車は十回転すると私は予想します。車輪よりも小歯車が速く回転するのは、車輪よりも強く小歯車が押されているからであると誰も考えません。

ところで動物とか民衆を有効に研究したいならば、彼らの意志を心配する必要はありませんが、検討する必要はあります。検討すればする程、恐らく機械のように大変複雑になるのですが、その機械の中では一つの歯車が他の歯車を押して動かしているのです。

私はある日、水が半分入ったバケツに子犬が入れられて嫌がっているのを見ました。子犬は半分ほど濡れた体を揺すぶって逃げ出しました。それから私が子犬を見たのは、入口で日の光を浴びて眠っている時でした。子犬は乾いている体の部分を影の方にしていました。従って、影の線は濡れて湿った毛の線と正確に一致していたのです。驚くべき知性の証しであるとあなたは言うでしょう。この犬は自分の体の湿った部分を太陽の方向へ向けたかったのです。いいえ、私はその様に物事を理解しません。犬は寒かったために走り回りました。日向で横になりました。何故なら日向ならもう寒くなかったからです。しかし、乾いた体の部分にはこれでは熱すぎました。犬は熱くもなく寒くもない所まで体を動かしました。民衆もこの様にして自分の体を動かします。

(一九〇七年七月一日)

歴史学者は私に言いました、「税金についてのあなたの論理というものは根拠がありません。税金には続発する事件があることを確かに私は知っていますし、経済学者たちが税金の偶発事件名でこの現象を書くようになってから久しいです。但し、それは殆ど私の研究に役立ちません。家の壁を貫き家族の真ん中で爆発する砲弾を仮定して下さい。何人もの死者や怪我人が出るのが分かりますが、体が二つに切れるのか、四つになるのか、一番酷い時は足が一本になるのか、無傷で済むのか、私には全く予想することが出来ませんが、弾道学のことなら大変良く知っています。税金のことについても同じです。狙いを付けて必然的に打ちのめすものではないことを私は良く知っていますし、思ってもいなかった者を傷付けることが確かにありますが、これらの結果の詳細を見抜くために私が自分の精神を消耗させるのは無駄なことです。それ故に私たちは如何に知るのでしょうか。出来事と言っていることは、科学というものが形而上学的夢想を排除した方法のことです。その中には物理学としての政治があります。それ故に経験を積むことです。統計学が私たちに教えてくれます」。

私は彼に答えて言いました、「あなたは新しく出来た薬を患者に与えようとしている医者に似ています。ここで問題なのは国民全体ということであり、恐らく十年間は続くに違いないことで、そしてその結果は取り返しがつかないものであることを忘れないで下さい。つまり経験に基づく方法は適切でないということです。よく言われている予備調査に関して言うなら、各人が収税史に幾ら払ったら良いか教えてくれるのでしょうか、払った後の結果については教えてくれません。まさしくそれが私たちの興味ある処なのです。

もう一つつけ加えて言いますが、政治経験の結果は殆どが本で読むことは不可能であるということです。従って、例えば所得税が物価の上昇と関係があるか私は知りたいと思います。人が経験していることを仮定して下さい。物価を変化させるのに多くの原因が介在している故に、物価を観察しても全く何も証明していません。例えば貨幣価値の低下はあらゆる物価の上昇を生むに違いありませんが、あなたに想像して頂きたいのは別のことです。どのようにして私たちはその中で自分を見出すのでしょうか。どのようにしてあなたが言う歴史の教訓を解釈するのでしょうか。

私は方策しか分かりませんが、その方策とは良く考えて決定された仮説から出発して、最良の可能性を知性によって予測しようとするものです。例えば私が関税の障害を仮定し、綿布の生産者が利益に新しい税金が課せられたとしたなら、他の価格は同じとしても綿布の価格が少し高くなることは避けられないと思いますし、綿布の消費者は少なくとも新しい税金の一部を支払うことになり、更には多分その全てを支払うことになるのでしょうか。ところで綿布は贅沢品ではないのですが、価格は高くなるのです」。

(一九〇七年七月十一日)

怒りや絶望や情熱の興奮した姿を避けるには、良い方法があります。自問しなければならないことです。「さっきの私が狂人と違うのは、何によるのだろうか」。恐らく、それは外的要因ではありません。何故なら、三脚の台の上で女予言者のシビラが多分行っているように話し、良く考えもせずに身振りを盛んにしているからです。それでは内部を見てみましょう。私の怒りとか悲しみに対して多くの正しい理由を見出します。しかし友よ、あなたが自分の情熱を正当化するために与えている理由を信じてはなりません。というのも情熱は真っ赤な光の一瞬の輝きのような会話に反映されて、それらの形が見分けられなくなるからです。頭が明らかにすることは胃が信じていることであり、それは誰でも共通した一寸した欠点です。優れた精神の持ち主は誰よりもそこに陥りやすいと考えて自分を慰めなさい。何故ならインスピレーションは時として真実を導くからです。しかし、それは危険な方法です。狂った方法でもあります。

それ故に、あなたの欲望に対しては知性を訓練して下さい。欲望のためには決して訓練しないで下さい。それは思っているよりも簡単です。結局のところ何が問題なのでしょう。あなた自身からあなた自身へ話を戻すことが重要です。それは恐らく、公開討論において発言を撤回することよりも容易です。一番容易でない話とは何でしょうか。

まさに私は次の様に言われるでしょう。演説とは何か。恐らくそれは些細なものです。演説は、沢山の人々とか沢山の欲望へ話しかけるものであり、けっして多くの力を持っていません。本当です。しかし、演説の力は決してゼロではありません。演説は興奮した人々の活動を調整します。演説は興奮した人々を指導します。最高の演説者が「バスチーユへ！」と叫びます。その日はバスチーユ監獄が占領され、大したことの無い演説ではなくなりました。

逆に、少しでも辛抱したなら、穏やかな演説は情熱を和らげます。というのもその様な演説と結びつくように努める力は、既に少しはあるからです。マルクス・アウレリウスはすっかり準備して演説したので大変に上手でした。こんな風です。「あなたが言うそんなにも悪い敵とは何か。哀れな者の革袋は、空気と血と食料で膨れ上がっているのだ」。これは演説での言葉でしかありません。それでも良いのです。しかし、もし演説から理性を取り除いたならば、何が残ると言うのでしょうか。

(一九〇七年七月十九日)

ナイフで切り裂かれたプーサンの絵(1)について、エンジニアは私に言いました、「芸術作品というものは、私に如何なる影響も生まなかったことをあなたに認めさせることが出来ます。美を感じる感情は私が知らない訳ではなく、全く逆に、私はそのことを大変生き生きと感ずることが出来ますが、それに反して私が醜いと思った対象を見ることは私を悲しくさせます。私が美しいと思ったり醜いと思ったりするものは、美術館の中だけにあるのではなく、それらは現代にあるものであり、役に立つものがあれば有害のものもあります。例えば四つのシリンダーを持った機関車には小さな管があり、レール上を前方に伸びていて、私は美しいと思います。それだけではありません。その機関車は力強く、万遍なく整備されています。その外観は考えることなく即座に気持ちの良い感情を生んでいるのが分かります。恐らくそのことが由来しているのは、この機械の大きさや形や歯車の位置が、結局は習慣によってやすやすと理解されているということです。あなたが本を読む時は活字や音綴に注意を払いませんし、言葉にも注意を払いません。あなたは直接的に観念というものを捉えているように思います。勿論、私も同じやり方でそれらのメカニズムを読んでいると思います。家についても同じで、最初に見た時、直接的に観念を捉えているに違いありません。視線だけで見抜かれているようで、その時は建築家が見る時です。

力強さや熱情がない馬であっても、美しい馬なのではないでしょうか。理性的でない訳ではないが熟考することがなくても事が上手く運び、健康な子供たちを持つことが出来ている女であっても、美しいのでしょうか。私が最近観察した飛行船の〈祖国号〉は、私には美しくないように思います(2)。私が次のように結論を下したことをあなたはご存知ですか。上手く塩梅されないその中には、既に何かの原因があるに違いないということです。それは権力の行使が悪かったりお互いが対立していることです。私はその原因を理解出来る前に感じています。何故なら私はその構造に慣れ親しんでいるからです。それが私の美学であり、あなたもご存知のように有用性や、有用性の科学に基礎を置いています。しかし、それは最も好みに五月蠅い男性たちや教養高い女性たちに軽蔑されています」。

私は彼に言いました、「元気を出して下さい。好みに五月蠅い男性たちや教養高い女性たちは、自分たちの道に従う哀れな羊たちであり、哀れな雌羊たちです。彼らの思考や感情は物真似によって齎されます。何故彼らは絵を描いたり、絵を見て驚くのでしょうか。何故ならその絵のデッサンが、実物の文字のように何かとても有用なものであるという時機があったからです。しかし、古きデッサンや古き絵画に愛着を抱く人々は、子供たちが兵隊ごっこをして遊ぶようにその理由を知ることがありません。彼らはそのことについては全てその意味を知りません。彼らは自覚せずに読書し、文学を一つに纏めて全て同じものとして楽しみますが、カード遊びをしている人々の顔つきのように笑うことがありません。」

(一九〇七年七月三十一日)

(1) ニコラ・プーサン(一五九四～一六六五)の絵画『ノアの大洪水』が、一九〇七年七月初めにルーブル美術館で

引き裂かれた。

(2) 軍用飛行船が、伝統的な七月一四日の閲兵式の時にパリ上空を飛んだ。

五十四 (ディアボロ遊び)

ディアボロ遊びは、本当に宗教に似ています。一本の糸の上で回転するのは独楽を二つ合わせたような棒状のものです。回転すればする程、バランスがとれます。それは宗教のことについて人が望めば望む程、熟考することが出来る喜びのメカニズムと似ています。糸が原動力となってその上で反応するこの回転する動きが、何故この小さな装置である独楽を常に一定に安定させて、上手く垂直に空中へ投げ出し、そして受け止めることが出来るのか、未だに私は全て理解していません。それを理解するようになるためには、少しはディアボロをやって楽しんでみたり、ディアボロをやって楽しんでいる人々を観察しなければなりません。私は、ディアボロ遊びという宗教の神学者です。

しかし、その遊びを実践する人々はそんなことを多く考えませんし、自分たちの楽しみとそんなにもかけ離れた処へ行きません。彼らはそこで手に入れた困難を理解し、上達して行きます。彼らは系統だったトレーニングをします。自分で新しいやり方を考え出し、もっと難しい遊びを行います。彼らは隣人と比較します。自分自身とも比較します。彼らの中で最も考えた人々は、ディアボロを上手に投げるためのトレーニング方法を書き留めます。その新しい宗教における彼らは、神学者というよりもモラリストです。

そして、今ここに数限りない信者たちの群衆がおり、ディアボロで遊んでいます。何故なら誰もがそれで遊ぶからで、ディアボロに喜びを見出しています。何故なら他の人々もそれで喜びを見出しているのを知っているからです。信者たちは平凡に遊びます。決して上達しませんし、新しいやり方も求めず、時間を費やすのが十分楽しいのです。

しかし、最も良く考えて手を加えている人がいます。彼は率直に信じる人であり、全てに無知な人で、思想も訓練も暇つぶしも全て宗教が存在するために理由があって、その中で接触することだけで喜びを与える新しい対象だけしか理解しません。その様な彼らは聖遺物に触れることしか望みません。私は昨日、或る少女に感心しました。彼女は紐も棒状の独楽も持っていませんでしたが、半分に壊れたディアボロの独楽だけで大変熱心に遊んでいました。

(一九〇七年八月五日)

古い大学は動き出しています。それを止めるために私たちが何をすれば良いのか、私には分かりません。良く言われてきたことは、窓をすっかり閉めれば「現代生活のメカニズム」に無知になるということです。三人の出来が悪い学生がいます、工業、スポーツ、衛生という学生ですが、彼らはラテン語作文やギリシア語購読の授業の時に大変に騒いでいましたので、老人はついに眼を覚まし、夢中になった子供のようにテニスやサッカーで遊び始めました。その結果、老人が被っていた敬うべき縁なし帽が少し斜めになっています。

遊びの中には酒を飲んでの酩酊も少しはあります。この趣向は大変なものですが。二十歳になる前でしたが、私はリセ（高等中学校）の中に新しいものを探しましたが無駄でした。でも手や顔とは別のものを洗うことが出来た目立たない僅かな空間がありました。今日ではプールや雨水槽しか問題になりません。しかし注意してみるべきことは、秘密の場所が嘗てあったように今日もあるのです。その水は小石を洗うためには具合良く流れますが、人々の体を洗うには良くありません。私は知っていますが、学生たちは毎日下着を替えるまでになっていませんので、シャワーを浴びた後で洗った下着を毎日着替えるという大変なリスクを負うことになります。

教育においても同じ状態を見ることが出来ます。人は実用的知識を望んでいます。しかし、直ぐに身を投じるのは最も容易なことです。流行に合致したシルエットを大急ぎで作ります。幼い子供たちは、外国の子供と親しくお喋りしてイギリスやドイツの人から教えて貰いますが、そのことは確かに役立ちます。しかし何よりも役立って実用的であるのは、先ずはそれらの物を良く知ることであり、次にそのことについて話すことであり、母国語で正確にそして明瞭に書くことです。他のことは独りで出来ることであり、取るに足りないことです。

イギリス人やドイツ人の会話を聞いてご覧なさい。あなたは目を眩ますことでしょう。質問と回答が鉄砲玉のように発射されます。「ご機嫌如何ですか。良くお休みになれましたか。好きな花はなんですか。いどこに手紙を書きましたか」。これは雨水槽です。雨を受け入れて役立っているのです。

その後、才気に満ちた学生が苦勞して父親へ手紙を書きました。この時はフランス語でしたが拙い文章であり、出来が良くありませんでした。これは洗った下着で、毎日着替えなければならないことなのです。

（一九〇七年八月六日）

五十六 (戦争における平等)

死刑は暗殺者を怖がらせないと良く言われます。断頭台や切断された首を見て殺人犯の将来を厳肅に思うことは、そこでは或る種の残酷な野生的ヒロイズムのように見えます。

言葉は、そんなにも強いものではありません。世界中の人々は気高さを必要としています。一人ひとりの人間が各々意見を持っていますが、規範に従って裁きます。従って、名誉とか不名誉は何処にもあり、監獄の中でも同じです。そこでは人殺しを悪と見做すに至る人々はごく僅かです。或る人々は戦争で人を殺すことがあり、他の人々は決闘で殺すこともあります。ですから重要なのは方法です。そして、裁判には一つの方法しかありませんが、それは平等ということ

です。少なくとも決闘におけるルールでは、相手は自分と同じ武器を持ちます。それは、私に許されていることは相手にも許されているということです。私が強く望むことは、私が相手と一緒に行動したいと思う時、相手も私と一緒に行動するということです。戦争においても同じです。軍人たちはこの時二つの国民になり、その違いによって最早個人は全体の一部でしかなく、自分なりに自由に戦いますが、限度が無い訳ではありません。戦争という偶然によって平等が回復するようになります。今日の私は一人に対して二人で戦いを始めますし、明日の私は二人に対して一人だけで戦います。私は砲弾の雨の下で、大砲を持たない敵の隊を押し潰します。そのことは、もし私が砲弾を撃つ大砲しか知らずに戦っているのでしたら、卑怯者になります。当時の戦争では恐らく、大砲を多く使います。以上のことは英雄主義を生むことになります。その時の理性は野生の本能に同意し、人間は全身全霊で臨みます。

殺人者にもこの感情があります。彼が、めったに殺す機会がない殺人者でなく、プロの殺人者なら尚更です。彼は罨が幾つもある戦争に参加します。攻撃し、背後を襲われ、逃げて、身を隠します。しかし至上の正義が一つの意味と気高さを、このこと全てに与えます。敵は策を弄し、変装した警察を為して背後から攻撃します。敵には死刑台もあれば、死出の支度という拷問もあります。最も勇敢で荒々しい者でも、背筋が寒くならず考えることが出来ませんが、それはまさしく平和を望む市民や首にネクタイを巻いて彼の処へ行く布製のエスパドリーユの靴を履いた人の間に平等を回復することなのです。結局、武器は平等であり、それこそが戦争です。彼らは言います、私たちは人を殺すが死ぬ術も覚えます。回り道ではあるが、恐怖は勇気を強いものにしてくれます。というのも私たちの情熱は、歩の駒に似ていることはないからです。本能そのものは単純ではありません。馬の鼻をつついてご覧なさい、馬は後退します。馬の胸をつついてご覧なさい、お互いに突き刺します。

(一九〇七年八月十八日)

ルーレットの館に這入る人々は、皆少し頭がおかしくなるのは自然です。偶然に期待する遊びは全て心地よい狂気を与え、私たちに神々や詩人の時間を連れて来てくれます。

賢明になればなれる程、私たちは予想します。つまり原因や法則を認識します。農作物の収穫を上げるには、祈るのではなくて種子を蒔かなければならないことを私たちは知っています。それはタイヤを使って速くしたり、ブレーキをかけて方向を変えたりすることであり、悪賢い才能ではありません。従って、私たちは最後には考えながらそれらの方法を愛することを学びますし、大きな苦しみを避けるために小さな苦勞を受け入れることを学びます。これが理性というものであり、理性はこんな風にして働いて貯蓄するように私たちを導きます。

しかし、人間というものは何時もこの様にして生きて来たのではありません、というのも原因と結果の連続は次から次へと原因が交錯しているために、時として眼に見えません。人は種子を蒔くことが出来ますが、何も収穫できないこともあり、余りに慎重であったために死ぬこともあり、酷く軽率であったために難から逃れることもあります。アルコール消毒はコレラを治しますし、煙は人間を窒息させますがハムを長持ちさせます。人間は長い間夢の中に生きていたのではないかと私は想像します。その理由は、夢は夢でしかないことを人間は認識することが出来ないうでいたからです。つまりその理由は人間に死が蘇り、欲望の力によってあらゆる物事が次から次へ行われると信じていたからです。彼らは、欲望との戦いであるこの世を理解していました。そこから詩が生まれ、倦怠が生まれ、祈りが生まれます。

この野生的で純真な人間は、現在の私たちとは遠い存在ですが、私たちの裡にもそっくりその儘生きています、というのも人生は何も忘れていないからです。人生は糸がくるくる巻かれて行く糸巻きの様であり、今日の糸は昨日の糸を隠します。その次に英知とは、時として退屈することです。何時も退屈していると言うことさえ出来ます。待つこととは退屈なことであり、方法の数を数えたり量ったりすることは退屈なことです。我慢した人生とは轡を嚙ります。従って私たちは詩や素直なイメージを愛しますし、星が糸を引く時、願わなかったのを私たちは後悔します。乳母の満足とは、私たちの胃が満喫することです。

ルーレットは、物事に無秩序を取り戻す素晴らしい発明と見倣さなければなりません。というのもその時、予測というものが不可能になるからで、労働は何の役にも立ちません。人は分別をもって全てに気を配り、期待することが出来ます。最後にルーレットに這入った労働者でも他の人々と同じ様にチップを受け取り、それ以上のことさえあります。慎重であることは結局軽蔑されますし、公平さは結局追い払われ、人間たちの上に新たに君臨しているのは微笑している〈希望〉です。

(一九〇七年八月十九日)

五十八 ディエップの棧橋 (LA JETÉE DE DIEPPE)

ディエップ (1) の棧橋で、私は鷗を捕る漁師を見ました。彼は緑色の海水の上に、餌を付けた釣針の長い糸を漂わせています。遠くまで良く見える漁師の両眼は、鷗の飛行を追い続けました。鷗は、翼をゆっくりと動かしながら、空中を漂っていました。丸い眼と首のない大きな頭が良く分かります。時折、鷗たちの一羽が小石のように水中に嘴を差し込み、旋回しながら再び上昇しました。美しい時間でした。翼は風を掴まえてはたはたと鳴り、泡が飛び上がり、イギリスの船が海上に白い小径のような航跡を残して遠離っていきました。船には、何時もの人々が乗っており、そこで何時も眼にするのは帽子を手に行っているパリジャンたちであり、スカートをはいたパリジェンヌたちでした。長身のイギリス人の顔は煉瓦色をしており、小さなイギリス人は緑色の外国製のラシャ地の服を着ていて、私たちの家では決して見る事が出来ないものでした。あなたの記憶力は苦もなくこの動く絵画を呼び覚まし、鮮やかな色彩と生き生きとした印象をそこから受け取ることが出来ます。何故なら、あなたは恐らく一度ならず鉄の塔のような船の元へ身を預けて、世界中を駆け巡りたいという衝動的な欲望を強く持ち、そして静かに与えるタールや泥の匂いを嗅いだことがあるからです。

空中をゆっくりと漂っていた鷗たちが丁度矢のように波の中に進入し、前よりも重そうに上昇して行きました。私の眼は鳥を捕る漁師に戻り、手早くひもを巻いているのを見ましたが、その動きは規則正しく、周りの見物人たちは行ったり来たりして騒いでいました。私の眼は糸を辿って海水まで行き、そして鳥まで行きました。鷗が掛かっていました。鷗は再び上空へ飛び、群の中で旋回しましたが前よりも速いように見えました。しかし私は、嘴を開けている鷗が見えま
すし、規則正しい手の動きで漁師が鷗を引っ張る糸を見ました。

小鳥はその時、全力を出していました。翼の激しい動きは空高くにまで飛んで行った翼の動きと一緒にあったのですが、殆ど眼に見えない糸は細くても餌の重さにもびくともせず、風が吹いても切れることもなく強靱でした。その糸は太陽の光で十分に成長した麻の根で職人が解し、梳き、その繊維を編んだものでしたが、小鳥は飛び去ろうとして翼を激しく動かしていました。何回もその動作を繰り返してから、糸と鳥は波の合間で交差し、そして起こるべきことが起きました。今、鳥の運命を読むことは容易なことです。鳥にとっては明日がありません。大空を飛んでいた鳥は海に漂い、その糸はぴんと張られています。そして自然の力には及ばず、世界は最早、不条理な夢想でしかありませんでした。鷗は再度、大空に飛び出して旋回し、再び荒々しく激しく爆発的行動を起こしましたが、無益な反抗でした。そしてその直後に、鷗は漁師に翼を捕えられて、両眼だけが激しく活発に動いていました。その間に漁師が考えていたことというのは、糸をきれいに巻くことだけでした。

(一九〇七年八月二〇日)

(1) ノルマンディー地方でイギリス海峡に臨む漁港、貿易港として栄えた町。

地理学者は言います、「樹木の信仰を取り戻さなければならないと思います。樹皮の下には半神が隠れていると昔の人々は言っていました。そこには美しい伝説があります。何故ならそれらの伝説は有益であるからです。今日では一本の樹木は不労所得の一つです。浪費家は莫大な金の割引を引き受けて、次々に現金化していきます。山の斜面にある森を全て破壊し、高所では雨水が窪地を作り、平地での洪水を生みます。樹木が愛されるべきものであるためには、学校でこれらのことを繰り返し言わねばなりません」。

哲学者は答えます、「宗教は誰も実際に信じていないのですから、大して役に立ちません。決まり文句を繰り返して言うこと、儀式ばかりやることは難しいことではありません。愛や怒りが襲って来る時、宗教は波の上の浮きの様なものです。何世紀もの間、人々は繰り返して次の様に言ってきました。〈お互いに愛し合いましょう〉。だがそれでも人々は殺し合いを止めませんでした。継続して信じられてきた宗教も、その波を巧妙に続けていたのです。あなたは子供の記憶を決まり文句で固定させて、習慣と感情と象徴を創りだして、新しい宗教を創ることを望んでいます。〈共和国万歳！〉〈アルコールとの戦い〉〈樹木を大切に〉。しかし、これらの言葉は、全ての詩篇がそうであるように効き目のない詩篇です。

別のことをやってみなければなりません。そのことを理解しなければなりません、詩篇であることはないでしょう。実際のことを理解し、説明しなければなりません。

そんなに昔のことではありませんが、或るロシア人が語ってくれました。彼の国では、何故か肥沃な平原に一人も住んでいないというのです。そこの冬は厳しく、大地は雪で被われますが、春は突然やって来ます。ところが森の一部が平原の中に残っている限り、人の気配があります。雪は樹木の下に静かに積もり、蒸発し、再び降り、根まで降下して、樹木を支え、割れている大地に染み込み、静かな泉となって遠い所から湧き出して来ます。もしもあなたが樹木を切り倒したならば、雪は大変に早く良質の腐植土を大河に運ぶ何千もの急流を生みます。全てのものは生まれると、残されたものを太陽は乾燥させて埃にして、風が運んで行ってまき散らします。泉は干上がります。するとあなたは、森や穀物の平原になっている場所に、サハラ砂漠と同じように最早誰一人いない不毛なものしか見ないでしょう。

理性と経験を使ってこれらのことを子供たちに説明してあげなければなりません、子供たちが想像している欲望ではありません。欲望は子供たちが知っている唯一のことです。あなたは子供に、銃は人を殺すことが出来て危いことを言います。子供はあなたが言うことを信じます。あなたが言うことは全て信じるが如くです。それでもやはりあなたの目が届かない日には、子供は自分の弟を狙って殺すこともあります。恐らく、弾丸、火薬、雷管、撃鉄のことを知っていたなら、そのようなことは起こさないでしょう。信じて予測しても、何の役にも立ちません。メカニズムの明晰さで予測しなければなりません」。

(一九〇七年八月二一日)

花崗岩の絶壁、雪の山、急流、不思議なものを見るために人は大変遠くへ行きます。そして、驚くべきものや美しいものには事欠きませんし、何処にでもあります。良く見ると全てのものが美しい。小麦の平原、飛翔する燕、空に浮かぶ雲、星々、そしてそれらのものは全て刻々と変化します。サルビアの花に蜂が這入ると、大変に繊細な小さなシーソーで遊びます。二本の雄蕊は花の兜から出ており、花粉で一杯の刷毛で昆虫の羽に塗っていきます。以上は、私の家のすぐ近くで見た素晴らしいものです。

少なくとも見詰めることを覚えなければなりません。そのためには旅行が役に立ちます。私たちが毎日見ている人々の顔付きは、殆ど見詰めていないことをそれは良く教えてくれています。重い荷物を運ぶのに慣れるが如く、人は見ることに慣れます。従って眼に親しんで良く見るものの光景は、最早私たちを目覚めさせてくれません。私たち大人は最早、子供のように感動を生むことを知りませんし、人が持ち運ぶランプの光だけを眼で追って行きます。私たちがすっかり眠って仕舞ったならば、既にほどほどに見ていたのです。しかし、物事が私たちの意識外では最早取り出せなくなるや否や、内面の話や思い出や計画の中に通じて行き、一つの言葉の中からも情熱へ通じて行きます、というのも誰もが何かを望んだり悔やんだりするからで、これらのことを考える観念が胆汁を動かして感動を生んでいるからです。このために人は劇場の催し物を調べたり、演技の内容をあれやこれや調べるのです。国が変われば、それだけで良いものになります。

少なくとも眼には処女性があり、そんなにも早く失ってははいけません。四歳になれば既に海や山を見て知っていますから、それらを良く見ないというリスクを負っています。私が初めて海を見たのは二十歳の時でした。海を見たからには、今となっては海を他のものと考えることが出来ません。かくして注意力が目覚めます。波の中にやむを得ず遊びの要素を認めてから、自然と平凡な日常的対象に連れ戻されても、同じ対象を感動して見直します。この様にしてたどたどしく読んだ後で、本を読むことを覚え、アルバムの中は手紙で厚ぼったくなったり彩られたりします。それ故に自分の裡で幸福になることを学ぶためには旅をしなければならないというのは、信じないかもしれませんが本当のことなのです。

(一九〇七年八月二四日)

(次号へ続く)

一ノルマンディー人のプロポ II
【2013年4月号】

<http://p.booklog.jp/book/69514>

著者：アラン （翻訳：高村昌憲）

翻訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/69514>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/69514>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ